（統一）
第二百三十二號
明治三十二年二月十四日第三種郵便物認可
大正三年六月五日發行（毎月十五日）

◀來れ大學傳道將に終らんとす▶

●精神問題を閑却せる文明は貧弱也片輪也●

▲健全なる國民思想は日蓮主義によりて洗練せらる▼

大正博覽會記念傳道

日蓮主義大講演會

▲會期　四月一日より百日間（休日なし）
▲會場　淺草清島町統一閣（清島町電車停留所より上野の方へ、三階洋館）
▲時間　毎日午後二時より四時半迄とす
▲費用　下足料も入りまん

主催　統一團布教部
（電話下谷六千三百十番）

●國民思想の危機を救ふべき教は日蓮主義也●

▲人としての全生活を送らんとする者は來り會せよ▼

●個人の向上と國運の興立は思想文明に憑る●

●各人自身の品格は自身の修養努力の報酬也●

七月號

第二百三十三號

統一

軍神加藤清正公

陸軍少將　小原正恒

勝鬘經大要

大日本帝國と日蓮上人

大僧正　本多日生
唯一佛教團長　清水梁山

龍の口夜半の太刀風　東家樂遊
已心所具の十界　井村日咸
歐米漫遊所感　代議士　田川大吉郎
爾の生活に統一（ありや）否や　三上義徹

◀爾の生活に統一ありやや否や▶

近代に於ける機械文明の壓迫は、爾をして享樂生活に奔走せしむるに急てはあるが、而しながら爾本來の生の躍動は、五十年の生涯を以て終焉を告ぐるものでないことに氣が付いて、自己を取り圍む紛雜なる感覺世界のほかに、自主の活動と價値とを認めて精神生活に入らんとする、こゝに二樣の生活を生じ、實在主義と瞬間主義との根本的對抗戰が開かれて居る、一方は感覺的に狹隘なる制限と位地とを繼承せんが爲に努め、一方は精神的に無限の運動と自由との生活を貫くために躍進し、兩者互に全力を盡して他の壓伏又は破壞を試みんとして居る、この兩者の根本的擴張の衝突は、適切なる調和の力を與へずば平和に妥協することの出來ないのみならず、爾の內部に二乘根性と菩薩の精神と對立するとせば、こゝに抵抗を生じて全存在の統一を缺くことになる、統一の無い精神の內部には、自界叛逆の難が起つて小人間的の網に囚はれ、自由獨立創始向上の力がない、若しや、爾の內部生活に統一が無くんば甚しき矛盾が起る、矛盾の存する所、不滿があつて遂には忍び難き缺陷となる、およそ、統一は生活の二方面を共同の創造に結合し、勇猛なる精神的努力によりて其基礎は確實となる、然らば即ち無限に向上する、日蓮上人の『師子王の如くなる心をもてる者必ず佛になるべし』とは、蓋し這般の眞理を言ひ顯はせるものであらう、斯くて爾の生存及事業は、他に對する成

●將に賣切れんとす●

▲こゝに殘本十數部あるのみ、この機を失して千歲悔ゆる勿れ

▲本書は現代知名の諸先生が日蓮上人の人格及教義の研鑽を發表したるものにして、日蓮主義が眞理批判の上に如何なる地位に在るか、又現代思想界革正の上に如何に大なる權威あるかは、六百餘頁に亘る金玉の文字の中に潛めり

內容

天晴會講演錄（第二輯）

豐富

▲講演者は本多大僧正、井上中佐、小笠原大佐、五島子爵、小林文學士、姉崎文學博士、高島平三郎先生、辻文學博士、松森僧正、柴田一能先生、竹內久一先生、田中智學先生、林陸軍中將其他の名士也

◎價格——一部金貳圓。郵稅金拾貳錢とす

◎送金——東京小石川白山前町三上義徹宛（爲替）の事

▲求道者の座右に本書なければ恥也書は其人の品格をものがたる也

◀不滅の生命と精神生命の活力はこの書に在り▶

績ではなく、自身の領分に於ける統一的結晶である、されば事業の努力は、一切を貫き多くの希望を與へる、事業は爾自身の本領を開展し完成する爲の戰にして、爾はその事業と共に無限の發展を意味するのである、何となれば、爾の活動に全体の觀念が働き支配するの力があり、全体の觀念は個々の活動を結合し調和して、爾の全本領が高まる、こゝに於てか精神的の千難萬苦は、無限界に包まれたる一波瀾として向上の歡喜に融化せられ、その前途には偉大なる救濟の力が爾の努力に結合し、茲に内的事業の成功を歩みつゝ、日蓮上人の『神の守り即ち強し』と云ひ『鬼に金棒なるべし』との理義は味識することが出來る、然れども、爾は人間的生活に於て、周圍の壓迫に逢ふて何氣なくも貪欲煩惱の支配する所となりはせぬか、全生活の發展の方向を不確實ならしめて居りはせぬか、法華經に警められたる『心常に懷懈怠、貪着於名利、求名利、無厭』と云ふ外的關係に征伏せられて居りはせぬか、斯かる統一を失ふたる衝突は、疑惑分裂無力に陷りて人間生存の沒落を來すことになり、無限發展の生活は一時にドット停滯するに至る、よろしく感覺性に打勝ちて大膽なる創造を遂げ、不斷の努力と奮闘とを以て統一ある新生活に入るを要する、爾の生活に統一ありや否や、這は實にその生存に甚大の關係を有する所以、深く精察を遂ぐべき重要の問題であると信ずる

勝鬘經大要

（被一閲における日曜講演にして記者の大意を筆記したるもの未だ講師の校閲を經ざるも夏期休暇中研鑽者の參考にもと掲げることゝなしぬ）

大僧正　本多日生

愛に勝鬘經の大要を講じようと思ひますが、日蓮主義者の中には奇異の感を起すものもありませう、從來日蓮主義者は、法華經以外の經典は一切適用しないと云ふて居つたのである、固より重要なる教義信仰は、法華經に依るべきことは勿論であるが、一切の經典は如何なる場合にも排斥し去るべきものでない、或場合は其趣旨を賛同し接觸を取つて行かねばならぬ、又或時は其經に隱れて居る所を闡顯して行くこともある、然るに絶對に之を忌み嫌ふ風がある、之は宗教修行の形式に於て排斥して居るから、それが推し及んで狹隘固陋の見解に陷入りたのであらう法華經以外の諸經に對しては、法華經の意義を明かにすべき必要に應じて運用活釋を自由にし、病見の存するや否やを考慮して取るべきは取り、排すべきは排すると云ふ公正なる態度でなければならぬ、法華經以外の教説は全部用へずと云ふは偏狹の見である、上人の立正安國論に、立正の證據を仁王經、金光明經、大集經、藥師經、の文を引いて居る、上人が他の經文を取りて用へて居るのは何う云ふ譯であるか、日蓮主義なるものは一切經を活釋運用する權能を有するものである、上人の遺文によれば法華經以外の經を應用するや否やは、既に明晰なる解決を與へて居られるのである、法華は大綱を存するものであつて細目は一切經にある、之を引いて法華の義を助成するは何等の差支がない、法華の義を以て其文

を開發して行くのである、曾谷抄(編遺文千百十二頁)に『今ハ弘通ス大法ノ之法ニハ必ズ安ニ置ク一代之聖教ヲ習ニ學スベシ八宗ノ章疏ヲ』とあり、即ち大法宣傳の方法は、一切經を備へ置て各宗の主義主張を究盡すべきである、法華經を中心に置いて一代の佛教を活釋して行くべきである、昔しは中心なくして諸經を用へたから、混同を來たして動搖するものがあつたけれども、現代に於ける宗教學の進歩は斯かる不健全なる思想狀態にあるものはあるまいとおもふ、而して勝鬘經は、我國に一大因緣がある、聖德太子は佛教興立の爲に盡瘁せられたる勤續者でありますが、法華經を中心として維摩經及び勝鬘經を採擇し、三部の經典としてこの思想の宣傳に全力を傾注せられたのである、而して自から勝鬘經を講ずること二回に及び、婦人修養の根本義を敎へたのでありますが、上人は深く聖德太子の勝鬘經を撰んだことを讃歎し、佛教宣傳の聖業に努力せられたることを敬慕されたのである、即ち撰時抄(編遺文千)に於て

『欽明の御子用明の太子に上宮王者佛法を弘通し給ふのみならず、并に法華經淨名經勝鬘經を鎭護國家の法と定めさせ給ひぬ』

と示すが如く、立正安國の源頭が、聖德太子に導かれて居る點があるとおもはる、又上人畢生の主眼たる法國冥合と云ふ思想の根據を築き上げられたのは、尠なくとも勝鬘經に於ける舍衛國が、大乘國であつたことを理想せられたのは爭はれぬ事實である、上人の遺文到る所に之を表明して居るが、特に敎機時國抄に

『日本國は一向に法華經の國也、例せば舍衛國の一向に大乘なるが如し』

と述べられて居る、即ち舍衛國は勝鬘夫人の熱烈なる信行の力により、女子は七歳以上悉く大乘を信ずる樣になり、この夫人の感化によりて國王の奉行となり七歳以上の國內の男子は、皆大乘の敎を信じなければならぬと云ふ事になつて、一國擧つて大乘に入つたのである、こゝに上人の考ふる法定まりて國富めりと云ふ理想が實現されんとする、日本國は舍衛國の如く成らなければならぬ、夫人の力により友稱王を動かし一

國を大乘にしたのであるが、日本の婦人は見識を持つべきことを主張されたのは聖德太子であつたのである、爾來千三百有餘年、現代日本佛教徒の有樣は、愈々退歩し貧弱になつて居りはせぬか、聖德太子の思想を以て立つて居たならば、佛教の全盛を見るべき筈であるが、事實は何等の生氣なく、唯だ囚はれたる形式の一あるのみ、須らく根本の精神に基いて佛教の復興を企てねばならぬが、無爲茫然として舊慣を固守し、宗教の意識信仰より流れ出づる感化の影響を考ふるものがない、之が現代の佛教信仰上大自覺を要するのである、我が日蓮主義者にも弊害が多い、信仰上の意識透明を缺いて頑迷に陷りて居るのもある、されば一切を顯顯して時代的に應用することが必要である、日蓮主義者の思想が國教統一の問題に向いて來ないのは、眞に慨はしい限りである、彼の傳教大師の叡山建立はこの國教統一の理想を實現せられたのでありまして、回小向大式を書いて陛下の勅裁を得て純乎たる大乘の道場のみにせなければならぬと主張せられたのである

上人の宗教改革は此精神を復活する事業である、立正安國の大体の輪廓はこの精神である、眞に世を憂へ國を救ふ大事業を行つたのであつて、千古に卓越せる偉人である、然るに囚はれたる偏見を以て之に崇敬を拂はぬが如きは、あまりに忘恩の態度と謂はねばならぬ而して現今宗教家が振はぬ權威がないと云ふが、宗教家も日本人より生れた子である、宗教の大切なることを考ふるならば適當に宗教家を尊敬するがよい、政治家も教育家も宗教家も蔑視して居るではないか、假し世人が如何に宗教家を嘲笑しやうとも、佛陀の光りによりて佛教は亡びるものでない、さう云ふ思想問題に冷淡なる國民は更に一段の訓化を施さねばならぬのである、こゝに上人の考ふる法定まりて國富めりと云ふ理想が實現されんとする、日本國は舍衛國の如く成らなければならぬ、夫人の力により友稱王を動かし一

幸にして昔し傳教大師に依りて雄大崇高なる主張が現はれ、日蓮上人は身を堵して之を發揮したのである故に上人を鐵仰するものは菩薩の精神を失ふを許さぬのである、偉大なる宗教的生活に在るものは、深くこの心懸けを忘れてはならぬ、而して日蓮主義者は、如上の抱負識見によりて諸經を包容活釋して行かねばな

らぬ

此の經の名は、勝鬘獅子吼經又は勝鬘一乘經と云ふべきである、通途勝鬘經と云ふ夫人の名前である、此の經の大意を明かにするには、左の項目を通釋すれば諒解することを得るのである

(一)眞實義功德章、始め佛が舍衛國に巡化せられた、其國王は波斯匿王と稱し、夫人は末利と云はれたが、印度第一の文明が行はれて居つた、或時王と夫人とは相語りて云ふやう、阿輸闍國王に嫁に行つて居る勝鬘は、吾等の最愛なる娘ではあるが、娘は未だ心の上に安慰を得ては居るまい、さりながら性來賢こき娘なれば、佛樣に逢ふて法を聽くならば、必ず立派な精神に成ることであらうと語り、兩親相談の上、佛樣の尊いことを手紙に書いて、末利夫人は臣旃提羅を使として勝鬘に贈つた、勝鬘夫人はこの母の手紙を見て佛の難有い事を知り、未だ佛に逢はざるも尊い所以を知りて居つたので、之を詳細に使に話して母に告げしめた、佛はこの雙方の菩提心を賞し、之を哀んで勝鬘夫人に逢ふた、而して佛樣の御前に於て、佛の廣大なる御德を讃歎し奉り、自分の佛法に於ける會得を述べて、(1)聲(2)普光(3)眞實功德(4)相妙色身(5)智惠(6)一切法常住(7)是故禮法王(8)眞理應用自在(9)攝持一切法と諄々として精神信仰を披瀝せられたので、佛は夫人の述ぶる所悉く誤りなきを賞し、菩提を得ること疑なしと印可決定を與へ、普光如來と記莂を授けたまふた

(2)十受章、佛法の心得べき事を十種に區別し、自分の心懸として持續して行くべき事柄を申し述べ、吾が心得が間違て居りまするかどうか御教化を願ひ、若し誤りなくば今日より乃至菩提を成就するまでは、この心得を忘れは致しませぬ、十種とは

第一不レ起二犯心一、第二不レ起二慢心一、第三不レ起二恚心一、第四不レ起二疾心一、第五不レ起二慳心一、第六著財〈爲二貧者一、第七攝二受一衆生一、第八令レ脫二衆苦一、第九拆二伏一惡律儀一、第十不レ忘二正法一と言ふので、之が佛教徒の信條であると思ふと申上げた、卽ち第一に宗教的道德的の規律を守りて背く心を起すことなく、

第二に尊敬を拂ふべき場合は敬虔の態度を以て接し、決して慢心を起さぬやうに、第三他の言論行爲が氣に喰はぬからとて腹を立つることをせぬ、第四は人の努力して成績を擧ぐるのを見て、憎惡の心を以てしてはならぬ、平和の心を以て讃歎すべきである、第五自分の知つて居る事は他に傳ふることを吝んではならぬ、第六の著財は自己の欲望の爲でなく、貧窮者を救濟する目的でなければならぬ、第七は社會に哀れなる孤獨鰥寡不具廢疾者に同情して、之等を適當に救濟することに努むることを心懸ける、第八は世には物質的生活にも精神的にも苦しみ惱んで居るものが多いが、之等に親切を盡して慰安を與へて行く、第九の折伏惡律義は間違つた思想宗教に囚はれて居るものには、正しき宗教を以て信仰に引き入れる、之れ日蓮主義の折伏運動の起る所以であるとも云へる、第十は佛の教の尊ときことを信じて强盛に行門を勵んで行かなければならぬのであるが、多くの人を救ふには、明晰なる意識を以て熱烈の運動を要するのである

(3)三願章、正法を得たるものは精神生活に退歩なく、益々勇猛の意氣起りて濟度のために盡すことが出來るのである、三願とは、第一に安穩衆生以此善根得正法智と云ひ、衆生濟度の事業が善根の力となり、この善根力によりて正法智を得らるゝのである、第二には「以無厭心爲衆生說」と稱し、既に正法智を得たる上は、横着なる放恣の心を起すことなく、熱心以て人類の爲に宜敎の益を布くことが出來る、第三に「捨身命財護持正法」と云ひ、全く宗教生活に入るときは、物質の欲望に支配せらるゝことなく、この身命と財とを超越して、正法の發揮に殫るゝの覺悟がなければならぬ、勝鬘夫人この決意を以て當らんと述べられたのであるが、是卽ち大乘佛教の精神である、又日蓮主義の本領であると言へるのである

第四攝受章、攝は着眼なり統一の意である、宋子の註には結ぶの義なりと云ひ、史記の註には整なりとあつて紛亂せるを纏める總ぶるなりとある、又は要扇の如しともある、佛教の歸結した信仰意識を以て生涯を貫

くと云ふのである、『恒沙ノ諸願入二此一願一』と云ひ、正法受持の中に無量の善根の雨を降らして一切を潤すことが出來る、一切の誓願活力は、統一的正法の護持によりて堅實となり、道德的活動の行が起る、『安二慰ス衆生一爲二世法ノ母一』とある、世法の母となつて世に立ち内部生活を送らしむる、六波羅密の行も皆如來の正法を興立せんが爲である、決して個人的に爲すべきでない、自分の行ふことが世を益し人心を動かして行くのでなければならぬ、如來の大精神に向て歩調を一にし、眞正なる團結を作りて其中に、如來の理想を實現すべく活動するのでなければならぬ

(5) 一乘章、統一しかる佛教徒の信仰意識を明かにして來る方向を示して居る思想である、如來の眞實義を顯はすものなるが故に佛乘と云ひ、狹溢なる排斥的の大乘でなく、一切の聲聞緣覺世間出世間の善法を出生すとある、卽ち天晴地明の傾きがある、佛の出世は世を救ふためにして死後の爲でない、卽ち此經に『如來ハ於二無覆護ノ世間無依ノ衆間一爲二護ンガ爲二依ンガ』とある、世には放浪生活にあるものが多く、精神生活の安立點なきに苦しんで居る、之等に根本的安慰を與へて方向を示して行く、卽ち三乘卽一乘と開顯して佛の實在を敎ゆるので、開三顯一の理想を語つて居る、今の如來は爲護爲依なりと云ふは、壽量品の本佛の意義を表はして居る、之れ實に佛敎上の重要なる敎義である

『世尊如來、如來無二有限齊時一住ス、如來ハ後際齊ニシテ住シ、如來無際齊大悲、亦無限齊ニ安二慰ス世間一』

と述べて居るが、斯の如く歸依三寶の關係を明かにして、中心を確立し、法と僧とに歸依するのは究竟の歸依でない、佛の難有き事を感憤せざるものは眞の人でない、如來に歸命して始めて眞理が立ち僧寶の活動があるので、如來を中心として法僧を包括するのが究竟である、之に就ては一体三寶又は別体三寶と云ふ事がある、「一体三寶の場合は佛を中心とする」、涅槃經に『欲ヒテ歸二依セント法一ニ歸二依セ如來一』とある、故に法及僧に歸依するは少分の歸依にして究竟でない、必ず佛

の大切なることを忘れてはならぬ、佛に歸依するは第一義である、この思想は千古の斷案であると謂はねばならぬ

(6) 無邊聖躰章、小乘には苦集滅道の四諦の法あるが、如來の眞實の智慧と云ふことは出來ぬ、何となれば世間を離れて聖躰を說くは誤りである、此の經に

『爲二無明殼藏ノ開眼演說ス是ノ故ニ爲ス聖諦一』

とあるが、眞に高邁なる人生觀である、世に隱れたる深い意味を啓發して行くべきであつて、現實の中に理想を立てゝ進み行くものなるを要する

(7) 如來藏章、宇宙の有樣を見るに、眞如と法性と一如する處、卽ち如來藏にして之を宇宙と云ひ、この宇宙は佛子の上には佛性となり、佛陀はこの一切を包容し躰現して居られる人格である、この宇宙的大生命は如來に於て知るべき境涯である、他のものゝ窺ひ知るを得ざる所である

(8) 法身章、法身は佛でなく、自分自身に持つて居る自性法躰であつて、我根本の性は淸淨である、思想の向上して行く有樣である

(9) 空義隱覆眞實章、如來の眞實に見る空は無ではないので、眞實は實在である、中道にして實相の妙旨が眞實の義である

(10) 一諦章、小乘の四諦を否定して第一義諦であると云ふことを說いて、佛敎の眞意こゝに在る、世を捨て又は世に醉ふのでなく、眞正なる無限の實在に向て進んで行くべきであると云ふて居る、卽ち信仰と生活とを調和したるもので、佛敎徒の根本信條が表はれて居る

(11) 一依章、紛雜なる思想生活を斥けて、純一に無限向上を辿るべきことを敎へたのである

(12) 顚倒眞實章、斷常の二見に四はれ、斷見を唱へて靈魂の滅亡を云ふが如きは、取るべからざる謬想であつて、常見に陷りて世の變遷なきことを云ふのも、之れ又一面に偏したる說にして取るに足らぬ、因果見を無視するは眞實義でない、常樂我淨の實在如來の實在を信じて、成佛の道を進んで行くのが眞實である

(13) 自性淸淨章、自性は淸淨であるが、之が如何にし

て汚されて居るか、卽ち客塵の煩惱が狼藉を働いて居るからである、この客塵煩惱は何處から生じたのであるか、自己の智を以て疑を起すよりも、微妙なる此關係は如來を信じ之に導かれて、こゝに始めて自性清淨の義を知るのである

(14) 眞子章、如來を信ずるものが佛子である、理窟に囚はれ學問に沒頭するは不可である、眞佛子とは此經に

『入二大乘一道一因ヲ信二ス如來一者、明信ナリ、隨二ヒ法智一』

とあつて、大乘の道に入らざるものは佛子でない、大乘により如來を信ずるものが眞の佛子であると云ふて居る、如來信の中に法智を包含する、而かも盲目の信仰を許さない、明かなる信仰でなければならぬ、明信は如來の隨法喜であらねばならぬと云ふのである、明信の文字、之に內含せる意義深きものあるを知る

(15) 勝鬘章、勝鬘夫人は以上の如き意味を述べた、佛は之に對して悉く正しき說であると讃歎せられた、而して友稱王亦大乘を信ずるに至る、依て斯かる尊い敎を以て、この國中の七歲以上の女子を化するに大乘を以てせんと誓ひ、其の誓願に

『國中女人、七歲以上、化スレニ以ツテ大乘一』

と、其熱烈なる感化は國內の女子をして大乘に入らしめた、こゝに於てか友稱王之に贊成して七歲以上の男子を化せんことを發願し

舉國悉ク向二ヒ大乘一

と云ふ狀態になつたので、所謂一向大乘の國たる含衞國は實現されたのである

此經は三千年前、以上の如き思想の發展があつたので、支那に譯せられて二千年、日本に渡りて聖德太子が盛んに鼓吹せられてより千三百年、思想文明に貢獻する所多大なりしも、現代の日本人は之を理解するものが尠ない、傳道者の足らざるを以て佛敎自體を誤るは不明の態度である、我日蓮主義は一切の光りの根元であるから、之等の諸經をも開顯して用へなればならぬ、此經の大要を觀來れば、亦現代の爲に有益なる經典である、法華經主義を以て他經を活釋することを忘れてはならぬ、本經の大意尙ほ盡さゞるも、其源泉を汲めば彌々深きものあり、大方の士女、自から研鑽の道を辿らんことを切望する

軍神加藤清正公

陸軍少將　小原正恒

私は先年房州小湊の誕生寺に參詣して、公の鐵兜を拜見した、其れには七字の題目が刻むてあつて、尙公の親筆であると云ふ裏面の黑漆の銘には

『世法卽佛法、爲二君父一捨身、則釋迦多寶十方諸佛可二必護送一寂光寶刹一也、勿恐勿退矣』

と在つた、公は實に此の銘を服膺して陣頭に立つたのである、卽ち白刃踏むべく、矢石冒すべしである、斯くの如き深き信仰を基礎とする勇氣あればこそ、大敵前に迫るも、毅然として能く奮鬪し得るのである

『唯信心に依るべし、法華經の劍は信心の健げなる人こそ用ゆることなれ、鬼に金棒なるべし』

と日蓮上人の仰せられたのも、卽ち是れである、公が木村重勝に與へられた文に

抽者軍功は大日本國は申すに及ぼす異國にても手にたつもの候はず蔚山兵糧盡きても諸卒に臆病者なし是れひとへに高祖大士を頭にいたゞき朝夕南無妙法蓮華經と唱ふるゆゑ軍に勝つ物不食とも命に別條なし此間諸軍に申觸るべし

應慶十二年四月二日　清正　判

とあるを見るに、公の勇氣は根を信仰心に發して居る卽ち日蓮上人に私淑して、其敎訓を色讀せられたのである、と思ふ、最近戰役の結果、我が軍に於ては益々攻擊精神を要求することゝなつた、私は思ふに、此の精神を養成するには、是等の箴言を座右の銘として修養に努むべきであらうと信ずる、斯して安心立命の境地に達せば、卽ち火も燒く能はず、水も溺らすことの出

來ない眞の大勇を得ることが出來るのである

信義

軍人は信義を重んずべし凡信義を守ること言の道にはあれどわけて軍人は信義なくては一日も隊伍の中に交りてあらんこと難かるべし信とは己が言を踐行ひ義とは己が分を盡すをいふなり

公が蔚山を出て機山に在りし時、敵は其留守を預つて居た淺野幸長を以て公であると誤信し、楊鎬、李如梅などの明の諸將が大擧して來り攻め、遂に其外郭を陷るゝに至つた、此の時幸長は公に代つて防戰最も力めたのであるが、衆寡敵せず、孤城の形勢日に蹙るの狀況に陷つたのである、公は機山に在て急を聞き直に之を赴援しやうとした、處が公の左右は狀況極めて危險なるを以て、諫めて往くことなからしめ樣としたのである、然るに公の申さるゝには『禪正（幸長の又）我に囑するに、幸長緩急あらば之を援けんことを以てした、今若し救援しないで、敵に委するが如きことあるに於ては、何の面目あつて天下に立つことが出來やうか』と云つて、直に蔚山に這入られた、當時の籠城日記の一節に『二十日夜清正公が舟に乘じて二十名を引連れ、城中に入られた』と書いてある、其然諾を重じ、數萬の敵の包圍を冒して、僅々二十人を率ゐて入城せられたと云ふ當時の光景を想像するに、實に好個の書題であると思ふ

凡そ信義は獨り軍人のみならず、苟も文明國の人民として、一般に之を尊重しなければならん、然るに事實は往々之に反するやうであるといふことは、頗る遺憾である、昔て英吉利の商人から煙草の注文を受けた時、我商人は見本と違つた品物を送つたばかりでなく中には土塊が混入して在つたので、英國では之を其僅日本の煙草として、博覽會に陳列したといふことを聞いたことがある、斯の如く信義なき處爲あるに於ては之が爲に我が國の信用を失ひ、延いて貿易上にも多大の損害を受けることになり、結極不利益を蒙ることになるのである

およそ人は正直にして相約したることを守らねばならぬ、然らざれば其人格は劣等に陷り指彈せらるゝに至る、日蓮上人の警訓に

『約束と申す事はたがへぬ事にて候』

とありますか言節にして意深きものあるを覺ゆるのである

質素

軍人は質素を旨とすべし凡そ質素を旨とせざれば文弱に流れ輕薄に趨り驕奢華美の風を好み遂には貧汚に陷りて志も無下に賤くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はじきせらるゝ迄に至りぬべし

公が家中に申渡されたる個條の中に『食物は玄米を用ひ、白米を用ゆるは曲事たるべし、衣服は木綿紬の類を用ふべし、其他娯樂には鷹野、鹿狩、角力の類を可とす』と在つて、質素を守り、尚武の氣象を養生せられた結果、其家臣は一般に剛氣慶直にして、克く艱苦缺乏に堪へ、綽々たる武功を顯はしたのである、玄米とあるも全くの玄米ではなく、半搗位の處で色の黑いのであらうと思ふものも在るか知らんが、私は全くの玄米で在つたと思ふ、何ぜとなれば、公は苟も實行の出來ないことは申されないのみでなく、陣中常に玄米一升（一說には三升とあり）を携帶されたといふことを見ても、さうであらうと思ふ

以上は勢論の五個條に就て述べたのであるが、更に智と仁とに就て見ても亦缺くる所が無かつた、將の智といふのは人を識ることである、公は能く正邪賢愚を識別せられ、彼の三成、行長の如き邪智奪愚の徒は、之を觀破して遠せられなかつた

元來公は思慮深遠にして沈默寡言であつた、左れば此の二人に對して斯くの如き有樣であつたのは、必ずしも私の感情のみでなく、深く考へ、遠く慮る處ありしに因ることゝ思はれる、又其他臣庄林隼人の草履取出來助を拔擢登用せられしが如きは、又以て公の人物を見るの明の高き一例とすることが出來る、其他國を治め兵を御することに至つては、世上既に定論があることで、殊に築城の術に精通せられ、名古屋城を始めとし、熊本城の如き、當時に在ては、甚模宏大なること、藩内無双である、公は熊本城の守兵を二百人と定め、其他は悉く野戰軍に用ふることにせられ、若しそれ以上の兵員を要するに於ては城の價値は無いと申されたといふことである、又菱鐵の如き副防禦の材料に

至るまで、周到なる注意を以て準備せられて在つたやうである、菱鐵は築城學の書物には書いてあるけれども、其實物を見たのは、公の造られた熊本城中のものが始めであつた、其他征韓論の當時鉄甲車を創造して晉州城の攻圍に成功せられしが如く、兵器に關する智識に於ても、亦超群であつた、更に籠城の準備の如きは至れり盡せりて、現に西南戰爭の當時、城中より食糧だの鹿毛草だの云ふものを掘出して、城兵が非常に助かつたといふことである、又八代、濱町、隈府、長洲の如き國境に大部落を建設せられたのは、戰時國境に大兵を集中するに便なるが爲と、平時に在つては、隣國の富を自國に吸收せんが爲であると云ふことである、其他土木に民政に、今日尙存して居る其治績を觀るに、公が決して尋常一介の武夫者でなかつたことが益々分明するのである

公が仁の志に厚かつたことは、法華經の信仰によりて佛陀の慈悲を得し、日蓮上人の大精神に啓導せられて居つたのであります、公が蔚山籠城中、城兵飢渴して壁土を喰ひ、溺を飲むといふ慘狀を見るに至つた時、城兵の中に意見を具して、『敵の降伏者は、諸代想恩の者とは異つて居るから、此際城外に放逐して可成城中の口數を減ずることに致し度い』と建議した者があつた、然るに公は斷然之を斥けて、『既に降伏して眯方となつたからには、餓死すれば共に餓死すべきである、之を城外に放逐して殺すことは忍びない』と申された、其同情心の深きこと概ね此の類である、彼のナポレオンが埃及遠征の時、糧食乏しきに至るや、敵の捕虜は悉く之を屠殺したと云ふことゝ比較する時は其慈仁と殘忍とは到底同日の論では無い、是に於て乎捕虜にして公を慕ふこと猶ほ赤子の慈母に於けるが如きあり樣で、公の薨去せらるゝや、金官と云ふ韓人の如きは、追慕の餘り殉死するに至れり、本妙寺境内大木土佐と金官との墓石は、今尙公の碑碣に侍して、養するものをして無限の感懷に堪へざらしめるのである

文祿元年四月公が太閤に報告せられた書中には『朝鮮國民の情況を察するに、假令之を釋して其爲す處に放

任するも、敢て敵對をなさず、故に未だ曾て一人の殺戮したることなし、尙部下を戒めて過ぐる處之を綏撫し財を掠め民を害することを禁ず』と在つた新羅の五陵巫山の靈廟、鮑石亭等戰後尙現存して居る事と、是琢の書いた朝鮮日記に『日本軍隊通過するも土人は依然として牛に跨り或は杖に倚つて緩歩するを見る』とあるを彼此相到照するに、公が如何に無辜を憐み、能く人民を綏撫せられしかを知ることが出來るのである、さうして、其人民に對して『予は汝黎民殊に鰥寡孤獨の爲苛虐を除き善政を布き以て塗炭の苦を救はん其れ速に其土に還り各々實業を修め遲疑すること勿れ』と諭告せられたので、各地の土民は此事を傳へ聞き、相率ゐて山間各地より出て來り、公の車の到るを待ち、糧食や酒肉の類を載せて、所謂簞食壺漿して王師を迎へると云ふ有樣であつた、之れ皆公の至仁至慈なる人格の反響である

公の偉大なる人格は、既に殆ど之を悉したのであるが、勅諭にも『抑も此五個條は我軍人の精神にして一の誠心は又五個條の精神なり心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にか立つべき心だに誠あれば何事も成るものぞかし』と仰せられてあるから、公の至誠であつた逸事を附加へて此の話を結ぶことに致したいと思ふ

文祿の役太閤は公と行長とを以て先鋒とした、併し漢城陷落の後行長は平安道に、公は咸鏡道に向ふことゝなつたので、行長は直に平壤を拔き、長驅して明に入るの慨を示したが、公は韓の二王子を追ふて深く北鏡に入つたのである、考へて見ると行長の向つた處は恰も戰略目標たる北京に達する本街道で在つて道路も善く物資も豐富であつた、然るに公の向つた處は、其迂路で在つて、山路險隘、物資も亦頗る缺乏して居つた、乃ち行長の前進は容易で、公は困難であるといふことは、最初からの數である、然るに明軍來り攻むるや、行長一敗平壤を棄てゝ退き、諸將亦退いて漸く漢城を保ち、纔に隆景つ碧蹄の一捷ありと雖も、我軍の士氣既に衰へて、攻守殆と其勢を變ぜんとする

に至つたのであるが、獨り公は、新に二王子を擒にし兵を北境に推して、後軍繼かず、孤立援なきも、其勢威は以て敵の氣を奪ふに足り、彼等の勝に乘じて漢域を力攻しなかつたのも、公が北境に在て絶ず其側背を脅威したからである、彼の宗曜昌の徒が『清正孤立す是れ虚唱を以て取るべし』と爲し、乃ち前に遣た憑仲纓を遣して、脅喝を試みたのであるが、忽ち公の爲に折られて了つた、是に於て明章は益々公を畏れ、『清正最も强悍、嚴勵謀あり』と云ふに至り、韓人亦呼むて鬼上官と爲し、小兒の啼を止むるに至つた、是れといふのも、一に公の至誠これを然らしめたのであると思ふ、巧詐は拙誠に如かず、行長詐を以てす、唯詐なり、乃ち沈惟敬之を欺く所以である、然るに公は唯誠なり、故に仲纓も を欺くことが出來なかつたのである、蓋し誠は自ら信ずるのである、自ら信ずれば則ち剛毅果敢、何物と雖も惑はすことは出來ない、詐は則ち然らず、既に自ら信ずる事能はず、則ち孤疑百出、遂に敵の術中に陷ち、敗亡するに至る所以である、中庸にも『誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり』とあるが、元來神といひ佛と云ふも、其本體は、誠する所誠であると思ふ、

先帝の御製にも

目にみえぬ神の心にかよふこそ人の心の誠なりけれ

と申されてあるが、聖慮の程仰ぐも畏き極である、至誠神に通ず、公の偉大なる人格は、實に神格に達せられたのである、本妙寺發星山畔の瑩域香華絶ゆるの時なく、加藤神社の靈威赫々として輝くといふことは、豈其れ偶然ならんやである、私は、世人が偏狹なる宗教的感情に過らるゝことなく、公を以て軍神としての儀表と爲し、これを憧憬し、これを崇敬して其感孚を受け、人格の完成に努められんことを希望致すのであります

日蓮上人の警誡

強盛にはがみをして
たゆむ心なかれ

大日本帝國と日連上人

（矢張に續く）

唯一佛教團長　清水梁山

▲徹底せざる憲法論

近來我國の學者間には、憲法上の問題に就て衝突が起つて居る、卽ち一方は憲法上の統治權は君主に在りと云ひ、一方は國家の統治は國家其者にありと唱へ互に學說上の見解を異にし爭つて居るのであるが、其當事者は美濃部博士と上杉博士である、美濃部博士は大權は國家其者に存し、君主は國家の統治權を代表的に行ふに過ぎざるもの、統治の大權は君主に非すして國家が統治の實体となるべきであると云ふのである、之に反對して上杉博士は、統治の大權は天皇に在つて國家にあるにあらずと說いて居る、卽ち一言にして云はゞ、大權君主說と大權國家說との爭である、而して世人は各自の好む處に依つて加擔して居るのであるが雙方の論據を考究して適當なる解決を金てなければならぬ、從來は

▲思想家の態度

憲法上の問題の如きは無用なりとして、其解釋に就ては少しも知らざる風であつた、然しながら斯かる思想上の問題は、民族の精神發揮に重大なる關係を有つて居るのであるから、宗教家は宗教家の立場として公正なる解決を與ふるの責任があると考へる、而して此の爭論の中へ新說として唱へ出されたのは、加藤玄智博士の說である、其說は普通國法の說でなく、博士の得意とする自然論でさる、自然論は卽ち哲學的であつて、日本の憲法を哲學的に解釋せんとするものである、法律上の見解の爭ひに哲學的解決を試みんとするのであるから

吾人が之を宗教的立脚より根本義を解説し、憲法上の精神を發揮するは當然の務であると考へる、柳も斯かる國體上重要なる大問題を法律家のみに一任して置くと云ふ事は不都合である、何人なりとも其適格なる意見を發表して、國民の歸趣を明かにすることが大事である

▲立憲的日蓮主義

日蓮主義は國家問題に密接の關係を有する、日蓮上人は立正安國を絶叫せられた、其意見は立正安國論と題する一書を公けにして之を發表せられて居る、立正安國と云へる四大文字、特に立正の二字最も大切てさる、立正とは如何なる意義であるか、卽ち如來の正法を立つると云ふ事てある、而して之か日蓮主義の上に於ける憲法の第一義てある、立正は立憲てある、憲法を立つるの主意が卽ち立正てある、立正ならさるは非立憲てある、佛教の上ては

▲念佛宗の如き非立憲

の思想てある、念佛は西方十萬億土と云ふことを說いて、日本にも娑婆世界にも無い阿彌陀樣を崇める其十萬億土に居る彌陀か四十八願を立てた、其中に我名號を一度ても唱ふる者をば必ず助けてやると云ふ誓願てある、四十八いづれおろかはなけれど十七八は彌陀のふりそてだと云ふのてある、日本の凡ての念佛門徒は此十七八の願を賴んて之を唱ひ、彌陀樣に助けて下さいと願ふて居るのてある、此助けて下さいと云ひ、助けてやるぞと云ふ間に、換言すれば統治者被統治者の間に關係があるべきてある、何故に名を唱ふる上に救はれる事が出來るのか、救ふ上にも救はれる上にも何等かの法があるべきてある、そこに密接なる關係が無ければならぬ、而るに阿彌陀樣は娑婆の佛ても無く又此世の佛ても無い、緣もなき處に依つて救はれ樣として居るのてある、古への武士には甲冑を見て伏禮せる者が多くあつたが、君主政体てある人民には何の理もなく强者に對して禮をすれば宜い事と思つて居つた、彌陀念佛の敎はそれてある、之を吾人より見れば非立憲と云ふのてある、日蓮上人は、南無阿彌陀

佛とは、はせない、本門の本尊本門の敎主釋迦牟尼佛と仰せられてある、若し此の中心を離れて動くものは所謂叛逆の者てある、阿彌陀が獨立して人類を救はんと云ならば叛逆の罪は免るる事は出來ない、我等の救はるゝは本門の敎主釋迦牟尼佛てある、日本の佛敎家は此事を知らずして、彌陀や大日などを立てゝ居る、之れ個人崇拜てある、自分が好きらしいからとて崇拜するとせば、狸にも禮を作すことになる、彌陀を信ずるは狸を信ずると同じ事てある、彌陀は五刼が間苦勞して我等を救はんと願はれたから、それを以て偉磊と云ふて信じたならば狐狸の崇拜と差別はない、西方の十萬億土に行つて歸つて來た者も無い、また彌陀の三部經を讀んても信ずべき點は見出す事が出來ない、三部經の中に貪欲瞋恚の人は彌陀を信ずるとも直ちに極樂に行く事は出來ないのてある、五百大刼が間極樂に行つても蓮花の中に包まれてあると說てある、卽ち之を懷合成佛と云ふのてある、然るに我等は皆貪欲瞋恚の者ともてある、一心に彌陀の名號を唱へて西方に行かんとしても、若し行く事が出來たにしても五百大刼が間、青空も見る事が出來ずに、暨獄にても入つた樣な有樣は、實に馬鹿氣れ事てある、假令懷合成佛てなく、四苦八苦の苦しみを除いて西方に往生するとしても、我等凡夫の考を以てすれば望ましくない、我等は妻子の爲め眷屬の爲め、又食物衣服の爲に苦しみをする、此苦を除かんとして佛樣や菩薩樣に御願して早く西方に行かんとする、然し此世に於て金を澤山に得たならば如何てあらう、食物衣服に少しも不自由が無いとしたならば如何てあらう、畢竟之等の欲望を滿たす事が出來ないから、此世の中には望みがないと云ふことになる、處が西方に行つて蓮華の上に端坐するとしたならば、如何がてしよう、飯も食はず酒も飲まず肉も食はずに五百大刼の端坐とは、實に苦心此上もない事と思ふ、善く行つた處て然うてある、五百大刼も蓮華に包まれて居ては實に堪えらるゝものてない、然るに法華經に來つては

▲調整せる日蓮主義

『當住此說法我當住於此……我此土安穩天人常充

滿』と說いてある、阿彌陀は固と是れ本佛の分身であつて、獨立的の本質を有するものでない、本佛の所說と命令とによりて働き得るのである、立憲の意義こゝに在る、非立憲たるを許さぬのである、日蓮上人の安國主義は國家の上にも思想の上にも、立憲的でなければならぬことを唱導せられたのである、上人が『日蓮が弟子は主上上皇の師範となり在家の檀那は左右の臣下に連なる』と仰せられて居る事は、日蓮上人の主義を奉ずるものゝ深く熟考すべき事である、而して上人が六百年以前に於て唱道せられたる立正安國主義は須らく立憲的たれと云ふにある、念佛無間等の折伏を加へたのは非立憲を破折されたのである、日蓮主義の上に立憲問題を論ずれば、法華經本門以前の思想は非立憲である、本門には開迹顯本の眞人格の佛陀を說いた、茲に眞の憲法論が成立するのである、法ヶ迹門に於ても法格的平等說はあつたが、此平等說たる迹門は取らずに本門の人格中心の立憲を唱へたのである、何となれば理平等は人を誤り秩序を破壞するからである、思ふに憲法上の所論の多くは法より起つて居るもので、この法格の上に更に事平等のある事を知らなければならぬ、國家に平等を見るのは迹門の說であつて、本門の義ではない、理平等は大日經眞言家の敎である、上人は之を理平等として破斥されたのである、又日本の國体を誤る西洋の平等說も、此迹門の理平等の分際である、何が故に理平等であるか否かを說かば、迹門には十界の互具を說くのである、十界とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上聲聞緣覺菩薩佛の十界である、此十界は互に具足する、地獄の中に餘の九界を具し、また佛界中にも餘の九界を備ふるのである、而して此十は迷悟の二法であつて、迷中に悟を具し悟中に迷を具へ、而も亦相關係の密接なる事は水と波との如く決して離るべからざるもので、衆生にも佛性を具すると云ふ佛性常住である、統治の權限か一般人にあると云ふは全く法華經以前の思想である、法華經には

▲絕對〈本佛―九界 / 天皇―臣民〉

と云ふ關係になつて居る、之を憲法に云へば、『朕カ之ヲ祖宗ニ承ケ』てと仰せられて、其承ける處を朕と宣給ひて居られる、天皇たる朕は祖宗の體を具へて居らるとの仰せである、是れ卽ち本門の意で有つて、開迹顯本の本佛である、決して理顯本でない、此事顯本である此事顯本に依つて本佛が現はれる

▲皇位の尊儼

なることは、天皇の朕と仰せられ祖宗の全體なる事を信ぜねばならぬ、此全體が國家の現はれて同時に亦た君主である、此れが世界に無比なる我國體の尊さ所以であつて、西洋の國法等を以て解し得べき處でない、然るに漫りに西洋の憲法を母法であるなどと云ふて、之れに依つて我憲法を說かんとせば誤を生ずること必然の數である天皇は『朕カ之ヲ祖宗ニ承ケ』と云ふからには、人間の作に非ずして天憲天法である、天皇は卽ち天子である、天皇を天津御位と云ふが、此御位天憲天法の位である、故に憲法には、天皇は國の元首と仰せられてある、然るに淺薄なる學者は、元首は「アタマ」なり天皇は我等人類の最高位に在らせらるゝ故にクビ」であると云ふ、而し元はクビとは讀まぬ、大權の依て生ずる處が元首である、大權の存する處が天皇である、字引には元は「モト」首は「ハジメ」とある、天皇は國の元國の首である、他國の如く國が出來て後天皇あり、或は約束或は武力を以て成立したるが如き國ではない眞の君主國體は日本の外には無いのである、外國には眞實の理義を具へたる憲法は有るべきでない、憲法と云ふ名を付けては居るが內容が缺けて居る、家が出來て子供があり、母が有つて後に父ある筈は無かろう、故に外國に國が有つて後に憲法が出來ると云ふ道理は成立しない、加藤博士は自然を以て說いたが、決して日本の憲法を理解し得るものでない、先づ元首は日蓮主義よりすれば明かに說くことが出來る、法華經の本門には本佛が表はれて居る、國家の上より云へば元首を明かせるものである、換言すれば天憲天法の元首を明すが本門壽量品である、故に日蓮上人は日本國を本つ國と云ふた、何故

に本の國と云はれたか、必ず其理が無ければならぬ

▲我國は大日本國

と云ふが、この國號は日蓮上人が始めて言はれた對外的の國號である、即ち小蒙古國大日本國を襲ふと申されたのである、水戸の義公が大一本史を作りて、始めは本朝史と云ふ書名であつたが、上人の御遺文を見て大日本史と改めたと云ふことを聞いて居るが、兎に角對外的に大の字を加へ用へしは上人を以て始めとする、又上人が本緣國と云はれたのはモトノユカリと云ふ事で大曼荼羅建立の國であるとの意である、而して大曼荼羅は本尊である至尊である、久遠の大權に依つて顯はさるゝので即ち統治の大權である、本門久遠の最初より統治者たる大權の顯はるべき國土即ち本緣國土である、日本國有つて始めて本門の眞義が顯はれ、此曼荼羅の現はれて始めて日本國の理想を明かにすることを得るが故に本國と云ふのである、之が久遠以來此日本國に約束が定まつて居る、此組宗以來大權の實在を以て天皇を說明し來れば大權存立の根據は明からにして、一點の疑義を挿むべき餘地が無いのである、我等の最も注意すべきは、憲法上に明かに大日本帝國と云ひ萬世一系の天皇と云ふ事である、唯日本帝國と云ふて可なるべきなるも、特に大日本帝國と云ふさうして、『天皇之ヲ統治ス』と云ふことにて充分意義を解して居るのであるに拘はらず、萬世一系の天皇と定められたのは甚深の理義あることを知らねばならぬ、從て國民も單に日本人と云ふよりも、大日本帝國臣民であるとの意味である、而して我等の仰ぐ天皇は萬世一系にある事を信ずべきて、憲法の主眼此に存するのである、然るに或る人は憲法の解釋は日本的思想のみを以て解するは偏見に陷る奧れがあるから、萬國共通に解釋すべきてあると云ふものもある、然しながら、之は謬想である、萬國共通であるならば大日本帝國と云ふ意義が成立しない、英國にも大英國と云はぬ露國にも大露國と云はぬ、獨り我國のみ大日本帝國と云ふは特別の意味があるからである、又萬世一系とゝふも萬國共通を以て解する事は不可である、日本の遠

法は特殊なる日本の歷史を以て解釋すべきである、日本の特殊の觀念は憲法第一條に明示する處である、然るに萬國共通などゝ云ふは徹底せざる所見である、我國民性の發展を妨ぐるものである、吾人は日蓮主義より明斷なる判斷を與へようと思ふ

惟ふに古昔は我國號は多かつた、先づ神代卷の國號は中津國と云ひ、又天照太神の千五百秋瑞穗國と云へるは中津國に美を加へしものである、神代に中津國と云ふは地理的でなく宇宙の中心の意である、宇宙の中心なる事が神代の中心である、また底津國と云ふは今の朝鮮支那の國を指したので、古へは橫にある事を下に行く事と觀たのであつて、左樣な時代に朝鮮支那を底津國と云ひ、故に一は天を指し一は地を指す中國にして之は最古の神代に名くる國號である、而して神武天皇國內を一統してより大和と云ふ名を以て日本全州を代表するものとなつた、何となれば大和は日本皇帝の御住まい遊ばす處である、故に總括してヤマトと云ふたのでありますが、大和と云ふも大日本と云ふも瑞穗國と云ふも、宇宙の中心の精神たる事を忘れてはならぬのである、宇宙の中心を我國家より離しては無意味の國となつてしまう、然らば中津國は何れより來るか、即久遠より建てられたる天地一貫の國である、故に日の本と云ふ、天の日の本の國より現はれた故に中津國と云ふ、換言せば天國と云ふ事である、此宇宙の中心たる意義を取り去りて、日本を解しようとするは能はざることである、又此意を離れては日本國は成立しないのである、尙其外に大の字を加へて居る、大とは天竺には摩訶と云ふ、摩訶には大、多、勝の三義を具する、大日本の中にも此三義を具するのである、されば宇宙の中心國たる日本人は當然天國の臣民である、豈に幸榮限りなき次第ではありませぬか

社會教育講演

歐米漫遊所感

代議士　田川大吉郎

六月十三日本郷東竹町小學校内本郷簡易圖書館に於ける歐米漫遊所感講話の一節にして、其說く所、醇厚の俗を成すに有益の點多ければ之を筆記して大方の參考に供することゝ爲しぬ（三上生）

最近短日月の海外旅行に於て、特に珍らしい新らしい事柄もありませんが、そのうち國民の氣風に關して參考とすべき一二點を紹介したいと思ふ

▲旅行中の親情

彼の地でも滿員の爲に三臺も四臺も電車を待ち合はすことがある、少しの隙を見出して乘ると先に席を占めて居る誰かゝ、私が外國人であると云ふので、必ず席を讓て呉れた、或人の話によると、電車の出來た當時は東京でも老人や小供に對して、よく席を讓つたものであるがこの頃は立往生をさせて、平氣で見て居るものが多くなつた、況んや外國人であるから席を讓ると云ふものに至つては、殆んど無いと云ふことである、西洋では老人小供を勞はることは勿論、乘客が切符を買ふ爲に金を渡すと、車掌は『有り難ふ』と云ふ、乘客は切符を受け取つて『有り難ふ』と云ふ、双方から御禮を言合つて居る、傍に聞いて居つても實に心持が宜い、東京では乘客と車掌との間は兎角圓滿を缺き、時には惡罵を浴せ掛け合ふて、他人の迷惑も顧みず、往々暴力に訴へるものあるに至つては、一等國の首府の市民として甚だ不體裁不面目な次第である

凡そ海外に出て言葉の通じない程、心細い、便りない思ひをすることはない、私は歐米を過つて居る間に、幾度かこの苦き經驗を味つた、しかし電車に乘つた時は、何れに於ても車掌に對し『これ〳〵の處迄行く』と通じて置けば、其場所へ行くと必ず叮嚀に教へて呉れる之が爲に困難をしたことは一度もなかつた

私は巴里から倫敦へ行つた、汽車に乘り、汽船に乘り又汽車に乘つて漸く目的地へ着くのであるが、其途次汽車から降りた時に、相當の手荷物はあり、是非共赤帽を勞はさねばならぬ、然るに其處には需要に應ずるだけの人數が居らなかつた、私は如何せんと暫時佇んで居ると、一人の海軍士官が、眞先に一人の赤帽を呼んで、同乘して居つた夫婦者の爲に荷物を運ぶように命じ、次に私を顧みて『貴方の荷物は私が責任を以て運ばすから、早く船にお乘りなさい』と優しい言を云つて呉れる、而して自ら赤帽を督し、全く運び了つた後甲板の上で變つた海の景色を眺めて居つた、私にそれと告げて下さつた、その間に稅關の役人が來て、乘客の荷物を一一調査し初めた、愈々私の荷物にもその手が觸れようとした時に、襄の士官は之を制止して、『この所有者は日本の紳士である、私はこの中に不正な品物の入つて居らぬことを保證する』と云つた、この地位ある名譽ある軍人の言明によつて役員は唯々として、感印を押して行つた、私は無論脫稅する目的を以て、酒や煙草の如きものを忍ばしては居らなかつた、けれども一々トランクを開いて改められると云ふことは、旅客に取つて非常なる迷惑である、私は士官の好意によつてこの厄を免れたのである、船を棄てゝ再び汽車に乘つた時は、列車を別にして居つたが、最終の停車場へ着いた時、私が降りた處へ駈けて來たのは例の海軍士官である、茫爾として『別に異條はなかつたか』と尋ねながら、又種々面倒を見て下さつた之が知己と云ふのでも亦友人から紹介せられたのでもない、全く初對面である、只だ外國人であると云ふので、この滿腔の厚意を受け、私は胸底から感謝せずには居られまかつた、しかし是は只だ其一例に過ぬ、私が漫遊して居る間にかくの如き氣風が歐米一圓に瀰漫して居ることを發見した

▲葬式と墓地

外國では葬式の行列が通る場合に途上の人は必ず足を停めて帽を脫

ぎ、それを見送ると云ふことを聞いて居つたが、實際を見ると果してその通りであつた、自働車や馬車に乘つた人々でも大概棺の過ぎる迄は車を停める、知人が花を贈ることは日本のそれと異らない、その形は花輪或は十字架である、この花が澤山の時は馬車に積んで棺の前後に置く、墓場には葬式のある毎に、馬車に積んで來た花が何層となく供へてある、而してそれが全く枯れて見る影がないやうにならねば、係りの者が之を棄てると云ふことをしない、日本の墓場では親戚朋友から心を籠めて贈つて呉れた花は、僅にその當日ぎりで無くなつて居る

西洋人は個人主義である、自己本位であると何人も云ふ、然るにその古い墓場を見ると、實によく手が屆いて、祖先を思ふの誠心が其所に現はれて居る、一體彼地では寢棺を埋め、石碑を頭の方に立て、棺の上は大理石等で疊み、或は自然の土を履ふた所もあるが、其所には必ず四季不斷の花が植えてある、それが幾百となく續いて居る、それ等の手入れの爲に植木屋が、彼所に二人、此方に三人と云ふ風に毎日來て居る、それだけ美しさは一層彩を增して行く、而して誰一人この生花や造花を折り取つて行くものがないと云ふことである、彼等は亦墓地と云はない、之を『平和の里』と稱し、都に近いものは大概市の管理に屬して居る、中へ入つて行くと、何年何月に亡くなつたと云ふことは書いてあるが、死んだと云ふ文字が使つてない、左樣云ふ場合には休んで居ると云ふ、寺院へ行くと建物の中に、有名なる政治家、著作家、藝術家等と云ふ人々の遺骸が葬つてある、その上に書いてある文字を見るには、自然棺の上を歩まねばならぬ、私が或寺院へ行つた時に、老人が子供を連れて、『茲には某と云ふ豪い人が休んで居られるのだから、靜にお歩きなさい』と小聲で諭して居たのを聞いた、彼等は只だ文字に書くのみならず、思想の上にも、所謂死んだと云ふことは久遠の眠り休んで居るのだとして居るやうである、之を以て觀ても祖先に對して、強い、近い、未だ生きて居ると云ふ考を以て仕へて居るのである、卽ち彼の

墓場を大切にするのも畢竟祖先を思ふの情が切烈なる所以である、こうした麗はしい氣風に漂ふて居る處は我邦人の大に學ぶべき點であると思ふ

▲庭園と公園

日本の家では少し生活に餘裕のある人は庭を持つて居る、而して其所に植えた草木を樂しむと云ふ風がある、しかしそれば多くの場合非開放的であつて、道行く人が勝手に見ることの出來ない仕組に出來て居る、東京に隨分立派な庭園を持て居る人もあるが、何れも家敷の内に在る西洋では之が家敷の外に在つて、その作り方も大體似て居るから視線の屆く限り、家と家とは庭によりて聯結せられ、燦爛たる美しい草木の帶を見るようである九段の上から見ると、春の東京は一圓の花であるが、戸々に就て見ると恰も敵の來襲でも防ぐかの如く、高塀や垣を構えて嚴然たる區劃を立てゝ居る、夫れ故に日本の庭は衆と共に樂しむやうになつて居らない、また公園に行つても、日本では芝生のある處は周圍に木柵或は鐵柵を設け、更に標札を掲げて『この中へ入るべからず』と注意してある、西洋の公園にはそう云ふ標札はない、而かも其芝生は年中紺青の色を湛えて水が滴るやうであるけれども、其處へ這入るものはないのみか手を觸るゝものさへありません、故に芝生は自然の天惠を受けて活き〳〵して居りまする、私が米國へ行つた時に、彼地で成功した古谷と云ふ老人が『貴下が御覽になつた通り、公園の芝生には柵もなければ垣もなく、又何等の注意書もない、併し私が渡米以來長い間未だその草木の倒れて居るのを見たことがありません、これが人間の尊い所でありますまいか』と云ふ意味の話しがありましたが、こゝに公共的思想の崇高なる點を見出し得るのであると思ふ、以上申述べましたやうに、直ちに取つて以て參考とすべき事もあるので、西洋の事であるからとて、一概に排斥して仕舞ふのは宜くないと考へます、公平に取るべきは取つて日本人の氣風を優美に致したいと思ひます、

家庭修養

已心所具の十界

井村日咸

開結二經の研究の後半を申上ぐる順序でありますが、酷暑の候ゆへあまり肩の凝らぬ程度てとの記者よりの注文、委細承知と返答は致したものゝ、未だ樂說陀羅尼を得さるの悲さには、何分注文の通には浮んて來ぬ何か斯かと引繰り返した處て目に止つた一節を申上げます、宿題の殘は凉風の立つ時まて暫らくお預りと致して置きます

さて世間の人々の中には、地獄極樂は此世の中にあるのて、未來の事てはないと云ふて居る人もある、其地獄には三丁目まてもあると云ふことて、辻々には長い伯父さんが立番をして居るとのことてありますが、これは全然無稽の事てはない、此世に地獄極樂があると云ふて、未來に苦樂あるを否定するは少々早所てはあるが、吾々は十界互具の體と云ふから、地獄の顯示もあり、餓鬼の表示もあるは當然と云ふべきてあります故に宗祖聖人は觀心本尊抄の中に

數々他面を見るに、或時は喜び、或時は嗔り、或時は平かに、或時は貪り現じ、或時は癡現し、或時は諂曲なり、嗔には地獄、貪るは餓鬼、癡かなるは畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天、平かなるは人也

と申されてありますが、吾々の心の中に種々の心が起つて來るのは事實てありまして、それが段々嵩じて來れば六道の形と顯はるゝのてあるが、吾々の心に起るのは其一部分々々が顯はれて來るのてある、此一部分の顯はれが重なると、最後には一つの纏つた形と顯はれる、此が未來の生となるのてある、丁度非常識の

異似を度々して居ると段々本物に近寄つて來る、最後は眞實の狂者と爲る樣なものてある、人々が一生涯の中に爲した最も勢力のある作業が次の生の原因と爲ると說かれてあつて、吾々の現世の中の作業に就ては、必ず其結果が伴ふて居るのてあるから、現世の所業に注意して行かぬと、飛んだ結果が現はれ來るてあらう其時に後悔しても何の役には立たない、現世の中に地獄極樂があると云ふて、自分の思ふ儘に振舞ふのは心得違てある、現世の中に地獄極樂があると承知すれば地獄の心は成るべく起さぬ樣に、極樂の心は始終起る樣に心掛けて行かねばならぬ、此心掛が宗教の信仰の萠芽てあり、世間道德の根基てあると思ふのてあります

世人の言ふ現世の中の地獄極樂は、あまりに簡單てあります、天台大師が止觀と云ふ書物の中に、我等の心の中に起る種々なる姿を十種に分別して地獄極樂は我心の中に顯はれることを述べられました事をお話致しまして、我等の心にあまりつまらぬ考の起らぬ樣に致したいものと思ふのてあります

一地獄道

若其心念々に貪瞋癡を專にして、之を攝むれども還らず、之を拔けども出てず、日日に募り月々に甚しくして、上品の十惡を起す、此は地獄の心を發し火途の道を行ずるなり

此は我々の心に地獄の心を起す有樣を言はれたので、我々が日々夜々に貪（欲望）瞋（瞋恚）癡（愚痴）の心を起して、いくら欲張るまい、怒るまい、愚痴を云ふまいと思ふても、中々止まない、此を「之を攝むれども還らず拔けども出てず」と云ふたので、斯る心は大體の人には起るので、此が段々と嵩じて來て、盜となり、殺人と爲り、自殺抔となつて顯はれ來るので、日々の新聞の三面記事は此地獄道の心の表示てある、火途の道と云ふは地獄畜生餓鬼の三道を火、血、刀の三に依つて顯はしたので、地獄道は八寒八熱とあるが熱苦の方が劇しき故に火を以て地獄を顯はしたのてある

二畜生道

其心念々に眷屬多からんと欲す、海の

流れを呑むが如く、火の薪を焚くが如し、中品の十惡を起す、此は畜生の心を發し血途の道を行ずるなり、畜生の心の起るを明かしたのである、畜生は多く群聚を愛するもので、多數集合して其勢力に依つて自己の欲望を達せんとするか其習性である、人間の仲間にも徒黨を作つて自己の我欲を達せんと欲するものは、到る處に充滿して居る、近來は其傾向が益々甚しい樣に見へる、世には憲政の發達とか云ふけれども、一面から見ると畜生道の心が發達したと云へるのである、畜生は互に相殘害し、血を飲み肉を噉ふが故に血途と云ふのである

三、鬼道

若其心念々に、名を得んと欲す、四遠八方に聞へ、稱揚欽詠せらるゝも、內に實德無くして虛しく賢聖に比す、下品の十惡を起す、此は鬼心を發し刀途の道を行するなり

虛名を博して自ら尊しとするので、世の中には虛名を博せんが爲めに、如何に心勞し居るものが多いかは、諸君の見聞せらるゝ處で充分であらうと思ひます、斯る徒等は鬼道の心を發して居るものである、『內に實德無くして虛しく賢聖に比す』の一句實に當世の人心を穿つたものと思ふ、鬼道は駈逼せらるゝに依つて刀途と云ふたのである、以上の火血刀の三途を三惡道と稱したので、通俗に云ふ、三途の川と云ふは此である、

四、修羅道

其心念々に常に彼に勝れんと欲し人に下るに耐へず、他を輕しめ自己を珍ぶ、鴟の高く飛んで下し視るが如く、外に仁義禮智信を揚げ、下品の善心を起し、阿修羅道を行ず

慢心の强きものを云ふのである、世の中には斯る人は澤山ある、此は修羅道の心を起して居るのである

五、人道

若其心念々に世間の樂を欣び、其臭き身を安くし、其癡なる心を悅ばしむ、中品の善心を起して人道を行ずるなり

人間は人間として自己の境遇に滿足する、人生に對して不平の懷かない處が人間の心である、而し世の中には自己の境遇に滿足して居る人は果してあるかどうか

七、魔羅道

若其心念々に大威勢あつて、身口意總に所作あつて、一切加ち從はんことを欲す、此欲界主の心を發し魔羅の道を行ずるなり

權勢に憧がるゝので、自ら一種の勢力を得で其威を專らにせんとするのである、斯る希望の下に生存して居る人種は少なくはないと思ふ、止觀には以上の外に六天道、八尼犍道、九色無色道、十二乘道の四がありますが略します、以上擧げました樣の事は人間社會にて通途の事杯て別段罪惡とは思ふては居りませんけれど佛陀の眼に映した吾人の所作は殆んと罪惡と見るのてあります、我々が日々の所作に省みて、阿修羅の心を發しては居ぬか、地獄の心を起しては居ぬか、常に反省して、幾分つゝにても善心の方に立還る樣心掛けねばならぬ事と思ふのてあります（完）

內省的信仰

濁水に玉を入れぬれば氷のすむがごとし、知らざる事をよき人に敎えられて、其まゝに信用せば道理きこゆるがごとく釋迦佛普賢菩薩藥王菩薩宿王華菩薩等の各の御心中に入り給へるか人格の修養とは、時代的に覺醒し來つた必然の要求であるが、崇高なる人格とは如何なる意義を具ふるを言ふのであらうか、哲學や宗敎の理論を知つて居つたからとて人としての格あるものとは言はれない、さりとて理論を缺つて行動の盲目的なるは條理に契合せざる所があるから、先天內容の上に乖離する、人格の修養は、道を履み義を行ひ節を守りつゝ、直往邁進して善事を積む所に格は具はる、即ち節義窮行は根本要件である、節義なきものは智者學匠なりとも、動物的生存に過ぎざれば人格的地位を稱ることは出來ない、その爲すべきことは斷手として行ひ、爲すべからざる事は死を誓しても爲さざる所に節義がある、この節義、節義のために辭間生活の不自由はあらうとも、永久的榮譽は自から獲ふことを得る、之を日蓮上人の愛護せられたる貞觀政要に

若ッ能克ッ全ニス此節ヲ則ッ保ッ令名ヲ、如ッ其ノ怠レバ之ヲ可シ不ル惜也、勉ニ勵ッ終始ヲ垂ニ範ヲ將來ニ、當ニ使下後之視ルニ上ヲ今ッ亦猶ッ今之視上ルニ古ッ不ニ亦美ナラ乎

と、吾人は更に信仰的節義を持して、無限界に活歩せなければならぬ、上人の「心みに法華經を心みよ」との警調は節義の根本を敎へたるものこの節義を守り行ふてこそ、眞に人格は完成し得るのである（白雲）

日蓮上人御傳記 龍の口夜半の太刀風

東家樂遊

節「日蓮佛勅を蒙りて、權實二教の軍を起し。心に忍辱の鎧を着けて。身に妙教の劍を帶び。權門かつぱと打ち破り、御法の旗を翻ひし。東西南北押し寄せて。千難萬苦も何のその。衆生濟度の爲めなれや」。

詞「文永八年は前代未聞の大旱魃、春早々から焦つ焦つて催り續け、八十八夜も過ぎて種下ろしと云ふのに苗代の水が一滴も無い、其内〳〵と待つ甲斐もなく早や五月の中頃になると、農民は何れも青息を吐いて大心配、到る處雨請を致して居るが其効もなし、かて〻加へて疫病が流行する、時の執權北條時宗甚く心を惱まして、鎌倉中の僧侶に仰せ下して雨請を命じた、中にも極樂寺の良觀は豫て己れの歸依する所、殊には鎌倉表筆頭の大伽藍である、こゝに更めて雨請の御頼みがあつた、そして良觀房、恭しく壇を築いて一山の僧徒五百餘人を集め、一七日の間嚴かに祈りを上げたけれども、雨はおろか、炎天ます〳〵地を焦すばかり、雨氣を催す雲さへも現はれて來ない、是ではならぬと法を咒すること又七日、されども天は何の應えもあらばこそ、一向雨降りさうな模樣が無い、愈々躍起なつて鎌倉中の僧衆三千人を狩り集め、香を焚き經を讀んで居る、宛然唐爪船を見るが如く毎日毎日圓ゐ頭を並べて、三七二十一日の行を致したが是でも不可ん、流石剛情我慢の良觀も、ホト〳〵思案に暮れて居る處へ

節「墨染の衣を召して唯だ一人。ブラリとこの場へ。現はれましたる日蓮上人」。

日蓮「當山の良觀御房は鎌倉中の大善智識と聞きしに、斯く多勢の僧徒を以て祈られながら、僅が一滴の雨だに降らし得ざるとは情けなき事どもかな、三千の僧衆三七日の祈願も何の甲斐あらず、斯くても尚ほ大善知識と言はれうか、衆生濟度も覺束なき限りなり、如何に良觀御房、今より念佛の信仰を改めて日蓮の弟子とならるゝ志はなきか、然すれば炎天に雨降らす位はお敎へ申さん、日蓮の云ふ所僞りにあらず眞實なり如何に思召さるゝや」

と高らかに呼はられたから、良觀房、怒るまい事か左なきだに心焦立つたる折柄であるに依て、頭からボツボと湯氣を立て、顏を眞赤にして其方を佶と睨んで居る

是より先上人は松葉ケ谷に時折出入する入澤の道淨坊と周防坊と云ふ兩人、之は良觀の弟子であることを聞き及ばれて、兩人を以て良觀に申し告げたのには

良觀御房、若し念佛の力に依つて雨を降らし得たらんには、日蓮法華經を捨てて良觀の弟子となるべし、然れども雨を祈つて其効無くんば、其時日蓮法華經の功力をもつて立所に利益を顯はすべし、左あるときは良觀念佛を捨てゝ日蓮の弟子となり、直ちに法華經の行者とならるゝや否や」

との口上。

節「之を聞いた良觀房。松葉ケ谷の日蓮奴。無禮の言を吐くものかな、左もあらばあれ我は惡迄も、念佛の功德に依つて雨を降らせんと」。

詞「扨てこそ必死に雨を祈つて、遂には三千の僧徒まても呼び集めたのだが、そもこの良觀は、大和國敷島に生れ姓を伴と云ひ、十一歲の時出家入門して修行を積み、十三歲にして穀食を斷つて國々を巡り、建長四年關東に來つて律宗を弘めたが、北條義時の三男陸奥守重時深く良觀を敬ひ、遂に極樂寺を建立して開基とした、それ等の緣によりて鎌倉中の智識と崇められて居る、然るに日蓮上人の嚴しい言葉があつたので、おのれ日蓮今に見よ、美事雨を降らして閉口さして臭れんものをと一心に祈つて居るが、經文の力なきにや、また德の足らざるにや、露ほども効驗が無い」

節「時は恰當六月の上旬。

詞「既に雨の降らざること一百餘日、樹々の稍も黄ばんで生ける草とては無く、燒くが如き炎熱の中に、此處を必死と三千の僧が聲を嗄らして祈りを上げる甲斐もなく、もはや三七日の日限が盡きんとするので、流石傲慢の良觀も弱はり果てゝ、大汗になつてお經を讀んで居る處へ」

セメ「雨にはあらで、大風ドーと吹き起つて、屋根を飛ばし樹木を倒し、砂塵漠々として天地も爲に晦まんばかり、動やともすれば身體さへも吹き揚げられんず凄ましき、群集の參詣人と僧侶の面々、是はと計り驚きあきれ、逃げ場を失ひ、右往左往に混雜する中を押し分けて、極樂寺の拜殿にスックと立つた日蓮上人」

日蓮「如何に良觀御房、尚ほ之にても念佛を信ぜらるゝか、假令萬部の經卷を讀誦せらるゝとも、三十一文字の德にも若かざる事萬々なり、昔し修行中途の能因法師伊豫三島の社前を過ぎらるゝ時、土民袖を控へて法師に請ひ、何卒我等が爲に雨を祈り玉へと强られたるより、天に身命を捧げて至誠に念願し

節「天の川苗代水にせき下せ
天下ります神ならば神」

詞「と詠じて三島の社に獻ぜられたり、されば天は眞實の誠に感じて卽座に雨を降らし、五穀實りて農民喜び合へたりと聞く、又和泉式部は女の身でありながら歌を詠じて等しく雨を降らせし事ありし、然るに何事ぞや、今此鎌倉に於て大善知識と人に崇められ、我日の本に隱れなき執權職の歸依深き良觀房の身にありながら、斯く多勢の僧を呼び集へて三七日が間も祈りを上げながら、一滴の雨さへも降すこと能はざるとは呆れ果てたる次第に候はずや

斯く云ふ日蓮は、末法應時の法華經に依りて甘露の雨を降らせんこと最と易し、我が法華經の甚大なる功力は、いざや之れより現はし見せん、若し之を疑ふものあらば、日蓮と共に田邊ケ洞に來たらるべし、我信ずる法華經の力に依つて天沛然として雨を下らさば、是迄の念佛修行を棄して法華の信仰に入れ、先づ日蓮の遠ぶる所、眞實なるか否やを眼を開いて見らるべし

と神座をキッと見渡される」

節「斯く日蓮に云はれながら。眼前祈禱の甲斐なき悲しさには。良觀始め數千の僧も、只だ一言の言葉さへもなく。日蓮の廣言忌々しくは思へども、顏も得上げず差俯向くのみ」。

セメ「はてし無しとや思ひけん日蓮上人は、弟子日朗一人を伴はれて極樂寺を立ち出で

此經難持。若暫持者。我卽歡喜。諸佛亦然

と御經を讀みながら、西の方田邊ケ洞へ急ぎ來られ」。

圓「掃上に差向ひたる上人は、南無久遠實成の釋迦牟尼如來法華經受持の諸天善神、並に日本國守護の天照太神八幡大菩薩、來臨影向知見照覽あらせ給へと、合掌禮拜をなし、聲高らかに藥草喩品を讀み奉る」

セメ「此の時不思議なるかな、炎々と焦り渡たる大空も俄かに日の光りを失ひ、ドンヨリ搖き曇つて來たかと思ふ間もあらせず、一叢の黑雲低く懸つてピカ〳〵と電光閃めき渡ると共に、オドロ〳〵と鳴る雷神凄じき響きを發し、是はと驚く其内にポツリ〳〵と大粒の雨が降つて來た、サア群がる人々夢かとばかり狂善の態上人一心に經を讀んで居られると、現證利益こゝに顯れ、篠突く如き大雨となつて盆をも覆へす勢ひなり」。

節「ソレ法華經の功力により、枯木も再び生き還るぞ田畑も元の青草となるは必定なりと。踊り狂つて老幼男女の喜ぶ態は、何に譬へん言葉もなく」。

詞「流石は末法有緣の大導師なるかな、良觀御房が三千の衆徒を集めて祈りに祈つた有驗に引き換へ、日蓮上人は日朗と共に、僅か一部の經も讀み終らざるに、瀧なす大雨は三日三夜と降り續く、そこてさしも涸き切つて縱橫に割目を生じたる田畑も、隈なく植付けを終つて民百姓はホット一息、陽氣の工合て恐ろしく流行した疫病も、一時に影を潛め、追々世の中も穩やかになつて大きに安堵すると共に、之れ偏に日蓮上人の御威德と、知るも知らぬも元の檀那寺を捨てゝ法華經に歸依して改宗する」

節「此方は極樂寺の良觀房、甚く恥辱を蒙つて。人に會はせる顏も無く。己れの居間に立て籠り。如何にぞ

して此の怨を返さんものと考へて居る」。

同「處で上人の方では、入澤の道淨坊と周防坊とを招かれて

日蓮「サテ御兩人、豫て申入れ置きたる通り、良觀御房が祈禱の効なかりし以上は、速かに念佛の行門を思ひ斷ち、日蓮が弟子となりて法華經の行者となり候樣御勸め之れあるべし、尙ほそれにても肯き入れざるに於ては、日蓮自ら極樂寺へ罷越して說く處あらん、先づ一應貴僧等より、御房に此旨を御傳へ下されたし

との御言葉、兩人今更詮方なく、不承〳〵に極樂寺へ參つて良觀房に斯くと通ずると、素よりひねくれ者の良觀何としても上人に隨ふ心は微塵も無い、そこで兩人も返事の仕樣に困つて暫らく松葉ケ谷に音信をもせない内に於て上人は、日朗日昭をお使として二度三度と御催促が有るのを、良觀如何にも殘念に心得、豫て惡僧原に相談に及んで

良觀「各々も知らるゝ如く不屆至極無禮の日蓮、若し此の儘に差し置く時は如何なる難題を持ち出さんも知るべからず、此の上は執權に縋つて日蓮を嚴罰に處するより外に途はない、彼れは一寺一山の住職と云ふにあらず、又何れの法弟と云ふにもあらず、無庵の坊主一人の檀徒とて有るべき筈なし、然るに彼が爲すまゝに任かせ、傍若無人の擧動を餘所に見て、日々に我等が檀徒の減ずるを待つは智なきに似たり、如何に然るべきお考へは非ざるや

と云ひ出しまするとと、何れも上人の高德を嫉む道中であるから、密々語り合ひ議を凝らし、翌日早速其向へ對して上訴に及んだ、其主意は

松葉ケ谷に居る日蓮と云へる惡僧は、衆生濟度に名を籍りて、上を怨み民を迷はし、漫りに他宗を罵り斥けて執權を蔑視し、大佛殿を燒き拂ひと呼んで國亂を祈り、極樂寺を乘取つて遂には大事を仕出來さんとする者、今に於て嚴罰に處せられずんば遂には斧を用ゆるの悔あるべし、速かに彼を召捕り、吾等の宗を盛んにせしめらるれば民目から安かるべし若し然らざるに於ては禍遂に防ぎ難からむ

と言葉を巧みにして己等の不法を隱くし、極樂寺の良觀は北條長時を以て北條時宗に讒訴を致した、そこて時宗程の發明な人でも、巧く讒者の口に乘つて上人を疑ひ、名を佛敎に托して人民を惑はし、上政治を罵るとは不屆至極、一刻片時も用捨はならぬと、宿屋平ノ左衞門ノ尉に嚴命が下る」

節「時は正に文久八年九月十二日と聞えたり。仰せを受けたる平ノ左衞門ノ尉は。武藏前司友房を副將として其の總勢凡そ三百餘人。松葉ケ谷の庵室目蒐けて驀地に駈け附ける」。

同「處が早くも此の事を聞き付けたる進士太郎義春、取る者も取り敢へず宙を飛んで先きへ廻つて太息吐き有りし次第を上人へ申上げる

日蓮「進士殿心配し玉ふな、日蓮法の爲め命を捨つるは衆ての覺悟、斯かる法難のあるべきは法華經の敎ゆる所に候はずや

と、の給へば、進士は感に打たれて合掌する、そこて一同の弟子を集め、御身等が此庵に居つては甚だ危し早々に立ち去るべしと仰せられた、然るに日昭は豫て上人より承まつて居る事があるので先へ立ち退く、流石日朗は立ち去り兼ねて、

日朗「どうぞ御師匠樣、一所に御連れなされて、どうぞ御供をさして下さいまし樣に

日蓮「オヽ日朗、其志は奇特に存ずるも、日頃日蓮の敎て居る事を忘れたるか、疾く〳〵此場を立ち去れよ

夏節「云はれて日朗。涙ながら跡見返り勝に出て行く」。

セメ「處へ宿屋平左衞門尉始め多勢來たり、上人に縄かけて、鎌倉さして引揚ぐる」。

同「鎌倉の肴町には、チャンと科人を乘せる駄馬が用意してある、之に上人を乘せて、何事ぞ謀反云云と云ふ旗を立てゝ市中を引き廻はしたから、信者の面々涙を流して別れを告げる、法敵の僧俗共之を見て嘲笑ひ小氣味宜げに散々に罵る奴もあり、人々追々に殖えて後ろに從いて來る、遂て鶴ケ岡八幡の社前に來ると、上人少時と馬の足を留めさせられ、赤橋の處で本社を白眼んて大音に云はるゝやう

日蓮「當宮に在す〳〵八幡大菩薩はまことの神か但しは邪神なるか、その古昔和氣の清麿神宣を伺ひし時、道鏡の邪心を斥けて遂にその慾を恣にせしめず、又傳教大師が宇佐の寶殿に法華經を講じ玉ひしかば、其眞心を納受ましまして紫の袈裟を授け玉ひしとか、然るに今、日蓮は法華經流布の爲に千難を凌ぎ身を捨て、苦行をするにも拘はらず、一分の罪なきに頸斬られんとするを、何とて見過したまふにや、昔し大聖世尊諸天善神を集めて宣示し玉ひけるには、此の法華經を弘むる者を守護すべし、末法濁惡の世にこの誓を果たせよとの法席に、御同座あつて御受けありしとは經に記さるゝ所なり、然るに何故あつて靈山の誓を反古となし、日蓮今夜頸刎ねらるゝを餘所にせらるゝは合點ゆかず、いそぎ〳〵誓狀の宿願を遂げさせ給ふべし」と叫ばれた

節「是を聞いたる群衆の人々。扨ては法華の行者日蓮も血迷はれたと見えにけり。」

間「下世話にも云ふ曳かれ者の小歌とはこれならん、笠止や首を斬られると聞いて取り逆上せたのであらうと、種々噂をして居ると

せめて「斯くと聞き付けた平ノ左衛門ノ尉頼綱は、家來を急がし有無を云はさず引立て〳〵、龍之口の刑場さして道を急ぐ」

間「柳もこの龍之口は七里ケ濱と稱へられたる處、六丁を一里として都合四十二丁の波打際、南は渺々たる波濤を隔てゝ遠く房總の山々を望み、北は稲村山と呼ばるゝ小山が目の屆く限りに連なり、時は秋の中旬、叢雲低く懸りて何となく憂れを催ふし、四邊の樹々は微かに枝を鳴らして悲しみを告げ、打ち寄する波は高く又低く、ザヽヽッと上人いまはの御姿は左も悼むかと疑はるゝ有樣

話しは前に、上人がこの龍の口へ送らるゝ途中、七里ケ濱の手前に津村と云ふ村端に、七十にも近き一人住居の老婆がある、この老婆、前年松葉ケ谷へ行つて一度上人の説法を聽聞すると、機緣熟せるものか深く法華經を信仰し、その後は何事をするのにも一心にお題

目を唱へて居るが、今はは老る年波に歩行も叶はねば、尊い上人の教化を受ける事の出來んので、どうお生活してあらうかと案じて居ると、此日村の人々が駆け來つて

「ヲイ〳〵婆さん、お前又御題目とやらを唱へて居るのか、そんなことを云つてると大變だぜ、お前が平常日頃尊とい御上人と云ふ日蓮が、何の罪かは知らないが今日龍の口で御仕置だと云ふ、今此處を通るからお題目なんか止めたらよからう

婆節「聞て驚く彼の老婆、思はず心も目も暗み後へに瞠とうち倒れ、氣も失はん計りなり漸々に氣が付いて、ア、情けない事なるか、せめては婆々の志」

間「何か上人へ差上げんと、搗りし飯に胡麻鹽縮め、盆にはあらで鍋蓋のうらがへし、涙ながらに路ばたによろほひ出て

老婆「ア、お役人樣、暫しお待ち下さりませ」

役人「何事ジャ」

老婆「日蓮樣に少々申上げたい事が御座ります」

役人「長くは相成らん、早く致せ」

婆節「馬の上なる上人の姿を拜んで、彼の老婆、眼に一ぱいの玉の露、御上人樣御情け無い御姿ぞ、せめて婆々の心遣り、是を召し上つて下さりませ」

容子見やりて上人は、ヲ、忝けなやこれ婆々よ、見らるそれまでは預け置く、其志は忘れぬぞ」

間「通りの縄目の身じや、歸りの節に貰ふぞよ、先づ

「之が年々の例となつて毎年九月の十二日、首繼ぎの牡丹餅と稱へて御供へをする

さて上人は龍の口の刑場へと着く、平ノ左衛門指揮をして斷頭臺へと押し据へる」

婆節「豫て覺悟の上人は。惡びれたるさま微塵もなく。着けし御袈裟を押し戴き。血に汚しては恐れありと。傍えの松の木の枝に七佛傳來の袈裟を懸けられた」

間「されば今に至る迄、此松を袈裟懸松と稱へて居る

此時平ノ左衛門ノ尉、言葉を荒らげ

平「コリヤ日蓮、其方の犯したる罪は覺えがあらう、今日此場に於て斬罪に處せらるゝ間、勝手次第に最期

の祈願を許す、これは執權の御差圖であるぞ」
と云ひ渡した、上人は劍士侍士に向て
日蓮「今夜日蓮生命を奪はるゝとも、弘めし法の靈光は御國の暗を照さなん、はや〳〵首を打たれよ」。
上人「神色自若として眼前生命を捨つるを知らざるものゝ如く、聲朗かに第五の卷勸持品を讀み上げられた
處がこの劍子を仰せ付かつたのは、依智の三郎直亮といふ人、拔けば玉散る三尺二寸の神蛇刀、ズラリと鞘を拔き拂ひ、足蹈みしめて身構の、大上段に振り翳し打下ろさんとしたりしが上人の容子をながめ、此直亮も歳はや五十、老前近き身を以て、いかに天下の嚴命とは云ひながら、佛門に歸したる出家沙門の首を打つとは情けなし、我は如何なる因果の末なるぞ
直亮「コリヤ出家日蓮、今より法華經を捨てゝ念佛の行者と相成らざるや、さすれば直亮、上へ願つて命乞を致ずがどうじや、いかに日蓮」
之を聞いて上人は
日蓮「その志は忝けなし、されども日蓮既にこの身を法華經に奉れり、大覺世尊吾が頭に宿りたまふ、これほどの喜び餘もあらず、とく〳〵首を打たれよかし」
泰然自若の樣子には、劍子の直亮深く感じ入つたが役目の手前詮方なく、上人の後ろへ廻つて眼を配つたから、群がる人々の中、アラ情けない御有樣かなと涙の雨や龍の口、御題目を唱へるは上人に歸依した信者方片唾を呑んで矢來の外に見て居るのは上人を知らざる人々で、何れも靜まり返つて視凝て居る
俄かに起る大旋風
せめ「平ノ左衛門が勵しき下知に、心得たりと三郎直亮、太刀振り冠つて後ろに廻るが、眞向からザアーと砂が飛んで眼鼻口の嫌ひなく、バラ〳〵ッと這入るから面を向けべき樣もない、是ではならぬと太刀を取り直さんとする折しもあれ、遙か江之島の方よりして一團の陰火、飛び來つたかと思ふと、地鳴り震動して空中にパッと光りを發し、大空に舞上るよと見る〳〵內鶴ケ岡八幡の方よりも、亦塊の怪火飛び來り、二ツ合したかと思ふと恐ろしき聲を生じ、轟々と雷の如き

物凄き音、今にも頭上に落ち來らんず不思議の有樣、油斷はならじと平左衛門
平「ソレ直亮疾く〳〵」
と急がし立つる
直亮「畏こまつた」
と神蛇刀を眞向に振り冠つて
『日蓮觀念』
と打ち下さんとなしたる時、天に霹靂地に震動立ち列ねたる松火提灯等火も一時に消えて眞の闇、礫の如き雨を卷てビューッと一陣の魔風吹き起つて砂石を飛ばし、物の黑白も見へ分かぬ怪しさに、之はと躊躇ひタヂ〳〵、首打つ音の聞えざるもどかしさ、平ノ左衛門氣を焦立つて
平「直亮何を猶豫するッと聲かけられ」
直亮「ハット答へて刀を取り直し。只一打と狙ひを定めんと焦慮るが、暗さは暗し上人の。御聲はさだかにそれと聞ゆれど。何れに御姿があるやら分らんから。讀經の御聲便りに」
「エイッ」
と一聲、及鳴りを生じて確かに手應へあり、上人の首は胴を離れたかと思ひきや、三郎直亮、頭上から大石に壓されたるが如く感じてグラ〳〵ッと眼眩んでドーと横樣に仆れ伏すと同時に、平左衛門尉頼綱も何者にか腦天を甚しかに打たれて、我にもあらず氣を失つて宛然死人の如く、此僅息も絶へたるかと思はれた、稍やあつて漸く生氣附たる三郎直亮、起き直つて四邊を見渡すと、コハ不思議や、さしもに荒れし風は凪ぎて海上の濤は靜かに收まり」
節「九月十三日の月は中空に冴え渡り、晝をも欺く一面の夜景。得も云はれん麗しさ。
圓「直亮傍へを見ると頼綱が仆れて居るから、駈け寄つて搖り起しなから
直亮「お奉行お奉行と呼はる聲の通じけん、これもまたガバと跳ね起きて
平「オヽ直亮、無事かと不審の面色」

節。互に顔を見合せたるまゝ言葉もなく。不思議の思ひに四邊を見廻すと。コヲ如何に。確かに首打落したりと思ひし。上人は無事なるか。讀經の御聲爽かに聞ゆる怪しさに」。

圓「愈々呆され尚ほよく見ると如何にやしけん、蛇胴の名劍は三段に折れてそれへと飛び散つて居るから、益々驚き、暴慢無禮の平左衛門も我を折つて

平「如何に三郎直亮、此の坊主容易に打ち難たしと云つて今打ち果たさざれば、後日お咎めも如何とは存ずれど、我れ聯か思ふ仔細もあれば、此由鎌倉殿へ言上せん、沙汰あるまでは汝に預け置くべし、伊和瀬大輔に目前見たる逐一を鎌倉殿に言上し、何分の沙汰受けよ、疾く〳〵と云ひ聞けたり、

せめ「ハット答ひてヒラリと馬に跨り、一鞭あてゝはや駈け出だす伊和瀬大輔、トウ〳〵〳〵蹄ゝ蹴立て鎌倉指して道を急ぐ、處が大風水の後だから到る處に出水夥しく、水量増したる川を渉り難所の道を厭はず、馬を急がし大汗になつて七里ヶ濱の金洗川へ來て向を

佶と見ると、之も急ぎの用あるにや一人の侍、後鉢卷漂々しく結んで濺る大水を事ともせず、洶然とばかり馬を乗り入れ、足搔きを取つて水中深く漸く馬の平首に取附ゐたるまゝ、此方を望んで流れを横切るものがある、月明に近付く顔を差覗いて雙方ビッタリ」

伊「ヤ、其處へ來らるゝは南條殿ならずや」

南「オヽ左云はるゝは伊和瀬殿か、先づ取急ぐは日蓮が身の上、もはや打果されたる後なるや如何に

伊「アイヤ其事なり、只今殿に言上の儀あつて、急ぎ之れまで立ち歸つてござる

南「シテ如何なされしや

伊「サレバ、語るも不思議の次第、斯く〳〵と手短かに話しをする

いま此處へ駈け附けたるは、北條執權の早打南條七郎信長と云ふ侍、日蓮の赦免狀を携へ來つた使者なれば未だ青葱の終らざるに

南「扨てこそ不思議、主君今日物の怪を御覽ぜられ、偖日蓮を誅すべからず、之に背かば秋立ち處に至るべ

しとあつて館の鳴動一方ならず、則ち嚴命に依つて日蓮助命の仰せを承まつたる某、時遲れてはと案じながら宙を飛んで漸く之迄馳せ付けたり、貴殿は御心安からざる主君へ此の趣きを言上致されよ

と云ひ捨てゝ風を切り砂を蹴立てゝ龍の口禁に差したる竹挾みの赦免狀

上人の前に讀み上げる

一、僧日蓮は誅すべからず

一、南條七郎を以て執達せしむ

一、追ての沙汰を待つ可し

文永八年九月十二日

之を聞いたる上人は、兩眼カット見開きて

節。仔細はそれと知らねども、思はず知らず笑淫す」。

圓「さて斯うなると、平ノ左衛門頼綱の取扱はガラリと變つて最と叮嚀になつた

さる處へ第二の使者が到着

相州愛甲郡依知の郷、本間六郎左衛門ノ尉重連へ、日蓮が身を預けよ

との下知であつた

節。法華經行者の御身の上、衆生濟度のそがために、一難は去るも亦一難、凝ては百錬の鐵となり、發ひて萬朶の櫻と匂ひ、譽れは高く日の本の、後の世までも香ばしゝ」。

圓「日蓮上人四ヶ度の御法難の内」

節。龍の口夜半の太刀風、之を以て讀み終る」。

濵界の雄努東家樂滝君、性義氣に富み、藝人根性の傲慢不遜の風なく平民主義也、昨今精神修養に努め、上人の偉大なる人格を讃仰しつゝあり、本講演は、六月二十二日東北飢饉の救濟義損の爲め、明治座に於て五日間に亘りて上人傳を演べたるもの也（白碧記）

活動史

東京

滔々として押し寄する享樂主義の激流は精神問題の堤防を決潰せんとする勢ではあるが日蓮主義者は孤節奮鬪死力を盡して適當の心的工事を施さねばならぬ鞠窮事に當るの覺悟を要するされば我黨が大正博覽會の開かるゝに際し四月一日より七月十日に至る一百日間の宣教事業その効果の目前に證明せらるゝものとてはないが熱誠なる講師の長廣舌二百六十時間三千餘の求道者に何等かの深き印象があつたことゝ信ずる殊に一萬五千部の文書布教を上野公園廣小路に於て配付したりしは尠なくとも現代に偉大なる人格に接觸せねばならぬことを自覺せしむるに有力なる機會を與へたとおもふ七月十日は滿願の日なりしゆへ多數の聽衆があつた藪肅なる法會を修行し各講師熱辯を振つて信仰の要義を說き多大の訓化を與へて爰に百日講演の會を閉ち終つた

會期中文書布教の爲に寄附せられたる信徒諸氏の至誠を感謝する

▲在京各寺主催の講演會は定例に開會し盛んに法鼓を鳴らして居る

▲小笠原島教會の吉塚道榮師は信徒宇田川清藏氏の招きに應じ弟島に出張し同氏宅にて信仰の要義を說き又弟島小學校に於て人生道德の旨意を述べ日蓮主義の思想を發揚し多大の法悅感化を與へしと

大阪

梶木日種金光孝碩の二師は大阪京都方面の巡教を行ひたり同師等の布教に熱心にして常に法輪を轉ずるに倦まざるは關西教界のため慶すべき事なりとす六月十三日午後八時大阪市西高津中寺町蓮成寺に於て開會「安心」鷲田顯正「歸依」實」梶木日種「精神修養に就て」國友日斌

六月十六日京都府綾部町了圓寺に着同夜開會

「開會の辭」木村義明「光と力」梶木日種「信心の心得に就て」國友日斌

翌日も又國友師の講話あり

六月十七日午後一時京都本山寂光寺に於て同地妙泉寺と合同の上昭憲皇太后百日祭を嚴修す坪永權僧正の導師にて同地諸師列席右終て講演に移る先づ同寺院代石井寛俊師開會を宣し

昭憲皇太后と法華經」金光孝碩「信仰の活力」梶木日種

六月十八日夜八時總本山妙滿寺に於て開演聽衆百五十餘名

「開會の辭」金光孝碩「宗教心と日蓮上人の教義」梶木日種「精神修養に就て」國友日斌

六月二十日午後一時大阪市生玉前町堂閣寺に於て新住京藤義應師の晋山式あり國友日斌師始め金光孝碩師並に組寺蓮成寺堺妙滿寺各住職立會同寺總代松田相馬濱中諸氏等大に斡旋奮力あり蓮成寺總代も出席し森嚴なる法會を擧げ終て開演」新任の挨拶」京藤義應「異体同心」金光孝碩「信心の心得」國友日

斌右終て祝宴を張り目出度結了したり

同日午後八時堺市花田口妙滿寺に於て開演「開會の辭」川崎英照「精神修養と日蓮主義」金光孝碩「宗教心と日蓮上人の教義」梶木日種「信心の心得」國友日斌雨中なりしも熱信者來聽感化を與へたり

六月二十二日午後一時大阪蓮成寺にて開山奏問紀念會嚴修あり參て小僧の得度式をも擧ぐ同夜公開演說を開けり「生存の意義」鷲田顯正「信仰の力」京藤義應「師日蓮上人の人格」梶木日種

六月二十六日午前十時大阪府三島郡耳原法華寺に於て新たに婦人修養會を組織し會員三十三名揃への紋付を着用し寺主葦名女饒師發會式を擧げ同地日教會幹事山中又吉氏大阪顯本婦人會幹事三田おせき女等各會を代表して祝文祝辭を朗讀し次て葦名寺主は「同會成立の趣旨」に就て講話をなし梶木日種師は「婦人と信仰」に就て講述し終て一同祝宴を張る大阪より婦人會員十數名隨喜參列頗る盛會午後三時より講演「父愛念子」金光孝碩「信仰の正路」梶木日種連日の雨降止まざりしにも屈せず會衆多く頗る盛況なりしを喜ぶ教へて怠らずんば熱烈の信徒を養ひ得べきものなり教家の自覺と努力こそ望まほしし

福井

五月廿八日午後七時福井市相生町妙經寺に講演會を開けり開會の辭增田聖道人の價値吉田堅晴精神修養に就て國友日斌聽衆百數十名にして非常の盛況ありき

六月十六日午後八時同寺に福井地明會を催ふし增田聖道師は會員と共に實前に修法夫より婦人の修養に就き講演を爲したり

六月廿一日午後七時同寺に日蓮主義聯合布教會を開催し開會の辭並に思想の開顯增田聖道教育と宗教石橋會章日蓮上人の長所朝倉一乘師等の熱心なる講演ありて百餘名の聽衆に感動を與ふる所ありしと云ふ

宇都宮

健全なる國民性の涵養と地方風教の改善刷新を計らんため日蓮主義の鼓吹と實行とを期せる安國會は其第四回例會講演會を六月廿一日同市商業會議所樓上に開けり定刻午後一時來會者の重なるものは新開觀學官伊藤高等女學校長寺山郵便局長本多市長等を始めとして遠路來會せられたる栃木町本化行學會幹事高田久次服部新五郎小池捨吉氏等は況後錄佛教講演錄等を寄贈し本會の爲に大なる贈援を與へられたり

「開會の辭」麥倉幹事「櫻島爆發實況視察談」下野中學校長稻田兵吾君「大國民の自覺」慶大教授柴田一能君午後一時より五時に至るまで大廣告舌を擬ひ三百餘名の聽衆に多大なる感動を與へたり

尙ほ當日一般來會者に統一閣より特別寄贈の日蓮上人と題する單行本を配布したり

此の施本の教益甚大にして日蓮主義讃仰の人士續々として來れ

▲安國會は軍隊慰問講話を實行し

翌廿三日柴田一能師は麥倉幹事の先導により騎兵第十八聯隊に至り中屋聯隊長及野口大尉の案内にて講堂に入り柴田師は全員大集合の上「軍人精神ト國民ノ自覺」に付て二時間の講話をなし終て營庭にて紀念撮影をなして退出し夫れより方向を轉じて午前十一時歩兵第五十九聯隊に至り聯隊副官の案内にて麥倉幹事先導柴田師は將校集會所に入り將校一同着席の上國司大佐の開會の辭あり柴田師は「國家ノ觀念」に就て一時間半の講話をなし日蓮上人の御國禮觀を論明し終て中餐の饗應を受け午後一時退出せり更に縣立中學校に於て同日午後二時より新保校長の招待する所となり麥倉幹事先導にて同校に至り大講堂に於て新保校長の開催の辭あり柴田師は「青年ノ修養に就て」二時間に亘る講演をなし東西の文明を論じ日本民族の天職と日蓮主義の特長を述べ甚大の感化を與へ茶菓の饗應を受け校教職員の見送を受けたりと云ふ

△精神之修養△
△思想之調整△

△一部金貳拾錢▽
△郵税金六錢▽

本多日生師の海軍大學の講演也
軍事教育會發行
東京小石川白山前町十七三上義徹宛申込みの事

日宗法衣專門
青雲帽 希教服 袴
此外法衣付屬品一切
京都佛具屋町五条
飯田法衣店
振替大阪六八四七

夏向用の御單衣として最も適當なる新製品
白新越後
壹反に付 正價金貳圓四拾錢
本品御召心地は眞正の越後縮に少しも變る所なし

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣
御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉强仕各宗の佛具一切陳列仕置候

正價 三法堂佛具發賣目錄 附
小包條例附(郵券四錢)

注意

佛具と唱すれども此の種類製品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛壇正價出張賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送附被下候はゞ迅速進呈仕候。此の目錄を御覽あれば寺院樣方の御入用品一切の買物何程達方でも坐なから買物安價にてき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は左の通り

●佛具●佛壇●仏具●金物一切●過去帳の類●大教若經●一切寫經●理趣分●位牌●太鼓●鐘●半鐘●木魚●拂子●鈴●香●珠數●大傘●扇●「●中陰●雪洞●錦●金襴●幡●水引●打敷●和幡●唐幡●人天蓋●樂器●樂器類●施●梨●鬼●輕●輪●尾●木像●財子●木●盤●壇●壇●盤●壇●三寶●經資●並に●平●椀●刷●匙●箸●獻●茶●湯器●獻●菓子●臺子●臺●行●鉢●座●量器●白●鉢●水●板●盛物●高●皿●茶●茶●文庫●茶具●膳●椀●線香●香具類●正價附にして御買物坐なから自由自在

佛具卸部
京都市三條通小橋西入 本錦
特電話二千七百八拾三番
三法堂藤田總次
振替貯金番號 大阪一四二五九 東京一二〇七一

小賣部
閑市三條通大橋西入
三法堂佛具陳列場

▲購讀料未拂者に告ぐ

△六月號に購讀料御拂込方相願度候處未だ御送金無之方も有之整理上當惑候のみならず經營上にも多大の困難相來し候次第に候故七月までの料金は本號發送と同時に集金郵便に托し候間御拂込被下樣相願候尚ほ數年間未拂にして集金郵便を拒絶せし方も昨年末に有之候も其は實に道義上遺憾と存ずる所に候

統一會計係

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵税ハ屋 一ケ年金七拾八錢 代金ハ振替貯金口座東京一二一九番ヘ拂込マレタシ此場合ニハ誌料ノ外ニ金壹錢ヲ添付前金ナラザレバ發送セズ

大正三年七月十五日印刷發行

發行人 東京市小石川區白山前町十七番地 三上義徹
編輯人 山根日東
印刷人 鈴木日雄

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 統一團
(電話下谷六千三百十番)

第二百三十三號
明治三十二年二月十四日第三種郵便物認可
大正三年七月十五日發行（毎月十五日）

法華經講義

▲混亂せる現代思想に最高指針を與ふるものは法華經也
▲文明人は最高の思想に接觸するを要す
▲吾人は文明人にして法華經は最高の思想也
▲然らば則ち文明人たる吾人は本書を讀まざる可らず

文學博士　三宅雄次郎君序
大僧正　本多日生師

▲文明人の誇りは財にあらず金にあらず洗練せる思想と高潔なる人格を具ふるに在り須らく第一の重寶として本書を備へよ
▲本書の再版將に賣切れんとす　此機を逸して千歲悔ゆる勿れ

特價金三圓
郵稅十六錢

發行所　東京淺草北清島町（振替東京一二一九）　統一團

▲法華經は健全なる第三文明を產み出すべき大なる力也▼

△再版將に賣切れんとす△

八月號

第二百三十四號

統一

神聖なる勞働

海軍少將　佐藤鐵太郎

蒙古襲來と日蓮上人

三上義徹

日蓮上人と婦人

マスター オヴ アウツ　柴田一能

佛教と道德

井村日咸

▲友に與へて信仰を勸むるの書▼

佛教と婦人の修養

大僧正　本多日生

國民教育と日蓮主義

子爵　五島盛光